

課題解決支援

おうえん BOOK

— このまちで見つける幸せ —



はじめに

佐賀県立生涯学習センター（以下アバンセ）では、2012（平成24）年度から佐賀県の委託事業として、この「課題解決支援講座」に取り組んできました。

この講座は、市町と公民館等※、アバンセの三者が協働して、潜在化している地域の課題を掘り起こし、解決するきっかけとなる講座として開催し、10年で31の地域で取り組みました。

専門家による講義や受講者同士の意見交換ワークショップ等によって、住民自らが地域の課題を解決していくための知識や手法を学習する機会を提供してきました。さらには、課題テーマに即した講座づくりのプロセスをとoshi、関係職員の企画力、運営力のスキルアップをはかることも目的としてきました。

始めから「課題ありき」や見栄えの良い課題解決イメージに捉われず、実際に市町担当職員や公民館、地域の方々と同じ目線で地域の課題とは何か、見えている課題は本当に地域の課題なのか、といったことから試行錯誤し、そこから掴み取った成果と今後に向けた課題をまとめてみました。

この本は、地域課題解決のための学習をどのように作り出していったらいいのかと悩んでいる皆様が、これからの地域づくりや人づくりのヒントとして、地域を改めて知り、住民みんなで話し合い、地域を考え直す一助にいただければ幸いです。

また、内容をさらに詳しくお知りになりたい方は、いつでも気軽に佐賀県立生涯学習センターにご連絡ください。

佐賀県立生涯学習センター 事業統括 上野 景三

※「公民館等」とは、コミュニティセンター、市民センター、まちづくり推進センター等といった名称の如何を問わず、公民館的事業活動を行っている施設を含みます。



contents

この本の使い方	03
地域の課題解決を支援する取り組み	05
課題解決支援講座の事例紹介	11
ワンポイント・アドバイス	31
伝えたいこと	45
編集委員メッセージ	49
アドバイザーコラム	53
これまでに開催した31地域	57
具体的な講座の企画書作り	61
笑顔を引き出す工夫etc	65

この本の使い方

この本を手にとったら

この本はマニュアル本ではありません。

ただ、あなたの地域の課題を知る一歩にはなるかも知れません。
 あなたの困りごとを事例の中から探してみる
 そしてその事例をじっくり読んでみる
 自分の悩みとどう違うのか
 どんなふうに地域へ学びを深めて解決のきっかけをつかんだのか

ここでは、アバンセが佐賀県内の市町と一緒に
 地域の課題へと向き合った10年間の試行錯誤が
 ぎゅっと詰まっています。

何が難しかったのか
 どんな学びを仕掛けたのか
 どこに気づき・発見があったのか
 どんなところに落とし穴があったのか
 どこに喜びがあったのか
 地域の住民のみなさんはどう感じていたのか
 じいーっと見つめて想像してみてください。

この本があなたの一助になれば嬉しいです。

この本の活用方法

手の届くところに置いて

そして何かが起こったとき、すぐ手に取って読んでみてください。

できればその後、周りの人と悩みを共有し、話し合ってください。

あなたの悩みは、地域の課題かもしれません。

この本があなたの手の中でボロボロになり

そして地域での行動を促してくれることを期待しています。

この本を手にとってほしい人

地域の課題ってなんだろう？ と考えている

市町の公民館職員、生涯学習・社会教育関係職員、

自治会役員、地域住民の方

そう！あなたです



地域の課題解決を支援する取り組み

地域課題解決型学習に取り組んでみませんか



この本を手にとられた方は、地域課題について関心をもっていらっしゃるでしょう。

けれども、地域課題ってなに？、地域課題解決型学習ってなに？、公民館でできるの？、私でもできるの？・・・とも思っているのではないでしょうか。

アバンセも最初は、そうでした。いろんなところで社会教育や公民館は地域課題解決にむけての学習を組織していくことが重要だと言われても、どう取り組んでいったらいいのか、まったく見当が付きませんでした。

地域をまわってみると、公民館の体制が少しずつ変化しており、いろんな事業も減少しているようでした。市町村合併もあり行政の体制も変わり、予算も減らされ、公民館主事の任用形態も変わったりと、この15年ぐらいの間に、いろんな出来事がありました。

それでも地域には、人が住み続けています。地域に愛着をもち、ここで暮らし続けたいと思っている人がたくさんいます。これまでと同じように公民館を愛し、公民館を利用してくれる人もたくさんいます。公民館職員は、そういう人たちの想いにどう応えていくことができるのでしょうか。

そのひとつの手法が、地域課題解決型学習をつくりだしていく講座なのです。そこに住んでいるというだけで、地域の団体や行事に参加するのは当たり前だと考えられていた時代がありました。今では、長く住み続けている人もいれば、引っ越してきた人もいます。農家もあれば共働き家庭もあり、シングルの家庭も珍しくなくなりました。いろんな人が住んでいるのです。暮らし方も変わってきているので、これまでのような地域ルールが必ずしも通用する時代ではなくなりました。

住んでいれば、誰でも幸せに、そして安心感をもって暮らしたいと思います。人生の時間も長くなり、住み慣れたところで、また友人たちがたくさんいて人間関係が良好な地域で健康に暮らし続けたいと思います。そんな地域を求めています。たしかに実際の社会は、高齢化していたり、買い物や通院に不便だったり、ご近所づきあいも少なくなったり、といろんな問題を抱えています。

地域課題解決型学習とは、地域が抱えるトラブルの解決法を探ると思いがちです。しかしそれだけではなく、誰もがここに住んでいて良かった、ここに住み続けていたいと思えるような地域社会をつくり出すことをめざしています。公民館の機能を発揮して地域の人々の暮らしづくりを応援することです。

アバンセの課題解決支援講座ってなに？

思い切って課題解決支援講座に取り組んでみようと思っても、具体的には何をどうしたらいいのか、なかなか考えつかないものです。公民館で何ができるのか、そこで行き詰ってしまう場合も少なくありません。誰かに相談したくても、いったい誰に相談したらいいのかわからない。そんな気持ちになったことはありませんか。

アバンセでは、10年前に市町教育委員会と公民館の3者協働で課題解決支援講座に取り組んでみましょと提案しました。というのは、その当時の市町教育委員会に「地域課題はありますか」と問いかけてみると、「地域課題はありません」、「地域課題解決とか考えたことはありません」といった反応が少なくなかったのです。地域課題がないはずはないのに、おそらく取り組む余裕やノウハウがなくなってきたのだろうと推測されました。

一人の主事だけではできませんし、単独の公民館だけでも難しいでしょう。三人寄れば文殊の知恵ではありませんが、アバンセと一緒に考えて取り組んでみましょ、というのが課題解決支援講座のスタートだったのです。一緒に地域の現実をみて、一緒に考えて、いい方法を開発していく。この本はその10年間にわたる記録なのです。

読んでいただくと試行錯誤の連続だということがわかります。なぜなら県内のどの地域もひとつ

として同じところはなく、同じ公民館はないからなのです。確かに一つの自治体内では、公民館の体制は同じです。しかし、そこに住む人たちの顔を思い浮かべたとき、誰一人として同じ人はいません。同じ公民館職員はいないのです。

他の自治体や公民館の取り組みは、とても参考になります。学ぶところも多いのです。公民館相互の経験交流や共有はとても大切ですが、参考になったとしても他の成功事例が自分の公民館で通用するかといえば、それは別問題なのです。参考にしながら、自らの地域に即して課題を発見し、それを学習課題として設定して公民館の講座を組み立てていかなければなりません。

それを3者協働で取り組んでみようというのが、アバンセの課題解決支援講座でした。どの事例も成功したのかと問われれば、皆さんの判断に委ねるしかありません。ですがアバンセとしては、どれも成功でした。かつ、どの事例も道半ばでした。つまり課題解決支援講座には終着点がなく、いつも道半ば、志半ばということなのです。人間が、幸せとは何だろうと考えながら生きていくのと似ています。幸せの結論はありません。それと同じように、生きがいをもって暮らし続けることのできる地域をつくることに終わりはなかったのです。

地域課題解決型学習によって 一人ひとりが主人公に

地域の課題と一言でいいますが、発見するのは簡単なことではありません。一般的な課題としては、いろいろと思いつくことができるでしょう。人口減少、地域団体役員の担い手不足、地域の祭りや行事の維持、防災組織の立ち上げ、コミュニティスクールや地域学校協働活動の立ち上げ、高齢者の生きがいづくりやサロンづくり等々たくさん挙げることができます。公民館では、これらをひっくるめて地域活性化策を作り出さなければならぬ、と考えがちです。さらに問題なのは、課題は絡まった糸のようになっていることです。

公民館は、何でも屋のように期待されるところがあります。しかし、すべてのことができるわけではありません。できるわけがないのにやろうとすると無理がでてきます。それがわかっているから逆に何もしない方がいいかも、と考えがちになります。絡まった糸をほぐすのは公民館の仕事ではない。団体のお世話や研修室を貸し出すのが、公民館の仕事だからと。

それでは地域づくりには結びつきません。幸せに暮らし続けることのできる地域を探し出すことはできません。しかし、やろうとすると手間がかかります。そんなことは、行政やコンサルタントに任せておけばいいのではないかと考える人もいます。ですが、行政は「共助」なのだから自分たちでできることは自分たちでやってほしいと言います。予算があればコンサルタントに任せる

こともできるでしょう。でもコンサルタントは夢を振りまきますが、一緒に考え行動してくれることはありません。どちらにしても、自分たちでやらなければならぬという結論が待っています。

考えてほしいことは、地域の困りごとを解決する、といっただけのイメージではないことです。というのは、行政ができないことの下請けや後始末をするのではないからです。例えば、ゴミ屋敷の清掃やオレオレ詐欺の防犯といったものです。これは社会福祉協議会や行政の仕事なのです。地域ではかかえきれない問題です。

公民館の地域課題解決型学習は、地域の困りごと解決というより、そこに住む人たちが、幸せに暮らすことのできる地域の未来にむけて自分たちの力で切り拓いていくことができる力を身につけていく、といった感じです。未来にむけての地域課題発見・解決力とそれを可能にする学習活動（エンパワー学習）がとても大切になります。言い換えれば、地域の一人ひとりが、地域をステージにして幸せを追求していく主人公になるといったイメージです。それを応援するのが公民館の役割であり、地域課題解決型学習なのです。



地域課題ってなんだろう？

課題解決支援講座に手を挙げる公民館は、地域活性化に向けてなんとかしたいという思いをもっています。防災教育をどう進めたらいいだろうか、子どもの見守りをどう進めたらいいだろうか、予算削減で祭りが維持できなくなった、まちづくり協議会の活動が停滞気味だけれど、どうしたらいいだろうか、などなどです。

おそらく他の多くの公民館でも、同じように感じていらっしゃるのではないのでしょうか。ですから、こういう地域の問題をすぐに課題解決支援講座で取り組もうと考えがちです。でも少し待って下さい。それが本当に地域の課題なのか、と問いかけてみてほしいのです。公民館が考える地域課題かもしれませんが、住んでいる方が同じように感じていらっしゃるのでしょうか。

公民館の課題を地域課題にしてしまうと、公民館の困りごとを地域の人に解決させていこうとしてしまいます。そうするとやらされ感ができてしまい、うまくいきません。大切なことは、「地域の課題ってなんだろう？」というところからスタートすることです。

そこからスタートすると、準備段階がとても重要になります。どうやって進めたらいいのだろうか、どうやって発見したらいいのだろうかと戸惑います。この課題解決支援講座では10年の間に、いろんなことにチャレンジしてみました。

まずは、3者間で意見の出し合いをします。始まったばかりの頃は、アバンセが公民館に対して聞き取りをするといったやり方をとっていました。しかしこれではアバンセ主体になってしまいます。それで途中から意見交換をしながら、プロセスシートに書き出していくという方法に変えていきました。皆さんが何を地域課題と考えているのか、共通点や関心の置き方の違いが一目でわかります。プロセスシートは、巻末に収録していますので参考にして下さい。

みんなで地域を歩いたり、車窓から眺めたりもしました。どんな地域なのか知らないで講座を組むことはできないからです。公民館職員も知っていたようで知らなかったりするような場所もありました。

講座に参加してほしい人たち、例えばまちづくり協議会の皆さんとは、事前の打ち合わせから入ってもらったりしました。また、講座第1回開始の前に0回目を設定したりしました。そうやって関わりのある多くの人で地域課題を丁寧に発掘し、準備していく過程が、テーマの設定につながります。結果として講座の成否に大きく影響していくのです。

課題解決支援講座の 企画と進め方

準備の中で、ではどういう風に具体的な企画を立てようか、という話になります。まずは、回数や内容についてのイメージを出し合います。回数はだいたい3〜4回が多いようです。それだけでなく0回を設定したり、プラスワン講座といって追加したケースもありました。内容は多彩です。地域が抱えている課題や地域ビジョン作成は、ひとつとして同じものはないからです。

でも手法は共通している部分もあります。例えば、イベント企画、まち歩き、地域調査活動、防災教育、学校との連携、地域内の交流促進などです。イベント企画では、みんなでひとつの目標にむかって動きやすく、一体感や達成感がもちやすくなります。まち歩きでは、健康ウォーキングや、カメラをもつての地域探検、危険箇所の探索などがあります。地域調査活動は、高齢者や地域住民の意識調査です。講座参加者の意見を聞いて質問紙をつくり、調査の実施も民生委員や自治会長の協力を得て行ったり、子どもたちにインタビューを行ってもらったりと、多種多様です。防災は、自治体の防災担当や国土交通省の河川事務所等の関係機関の協力を得て行います。学校との連携は、授業の総合的な時間を活用します。地域内の交流は、アイスブレイクを行ったり、お茶・お菓子コーナーの設置、座談会、発表会、交流タイム、一品持ち寄り企画を作ったりといろんな取り組みがありました。

共通しているのは、まずは参加者の皆さんが楽しいなと思ってくれることです。そして意見が言いやすく参加者どうしの仲間づくりがはかられていくこと。意見を共有すること、地域とむきあうことのできる材料（調査結果など）をつくり出すこと。講師の先生から専門的に学ぶこと、等が挙げられます。

これを繰り返すことになります。しかし、単に繰り返しただけでは、講座は深まっていきません。回と回の間に、必ず振り返りと次回の準備の時間を取ります。振り返りでは、こんな発見があった、参加者の一言が心に響いたなど、気づいたことを共有します。それをまとめて「講座通信」として発行し次回に配ります。欠席者も前回の内容がわかり、スムーズに話についていくことができます。

次回の準備は、気づきを踏まえて講師との打ち合わせやワークショップの段取りを行います。講座は生き物のような側面もあります。最初に企画した通りに進めるというわけではなく、参加者の皆さんの楽しさが増したり関心が高まったり、行動に移したくなるような手立てが大切になります。講座の企画とは、このような一年間にわたる一連の動きを意味しています。

課題解決支援講座は、 一年では終わらない

課題解決支援講座の回数は、多くても4回程度です。実はこれでは、地域課題解決には結びつきません。地域のことがわかり、問題状況が理解できたところで終了してしまいます。ようやく地域に対する関心が高まり、活動に向けての芽ぶきが見られ始めた程度です。問題は、これからどう育てていくことができるのか。公民館の腕のみせどころです。

循誘公民館で、見守り隊のボランティア養成を企画しました。3回の企画です。ですが、3回の講座ではボランティアへの理解やモチベーションを高めるところで終了してしまいました。だから最初から、フォローアップの講座を組んでほしい旨を伝えておきました。公民館は、講座終了後、引き続き「お茶ご会」を開催してくれました。そのときに参加者から、次の年度は「カレーの日」をやろうという提案がありました。それが今の「毎月10日はカレーの日」なのです。

「カレーの日」は、公民館の利用者団体の持ち回りで実施されていきます。そのうち、公民館主催の「男性料理教室」の受講生が加わります。さらに中学校の生徒たちが加わります。こうやって「カレーの日」の運営が広がっていきました。一方で、あまり公民館を使ったことがない大人たちや引きこもりがちの高齢者を誘い合って「カレーの日」に参加する人たちも増えてきま

した。結果として住民間の交流が盛んになり、高齢者の見守りが実現していったのです。

課題解決支援講座の成果は、開催年度だけでははかれないものです。最初の年は、キックオフのようなものです。それから参加者の皆さんの気持ちや関心を寄せ集め、解決へ向けての一步を踏み出していく。そんなプロセスを辿っていきます。だから一年では終わらないのです。

そうすると、公民館として考えておく必要があるのは、講座を展開しながら、それを次年度の講座や活動にどうやって発展させていくことができるのか、という点です。最初から考えても無理がでてきます。しかし、考えておかなければ、せっかく高まった感心が消え失せてしまいます。

継続の方法はいろいろです。集まるバーを開いたり、子ども横丁を続けたり、コンサートを開催したり、ウォーキングマップづくりに取り組んだり、キャンプをやったり。せっかくの関心を、ささやかでもいいので継続していく取り組みを工夫してほしいものです。

地域課題解決型学習は、息の長いものです。地域で暮らす幸せを、ずっと探し続けていくようなものです。楽しいものですが、公民館も息切れしないように、研修を重ねながら伴走していきましょう。



高齢者の孤立をふせぐ

勸興は繁華街に隣接する地域で住宅地は少なく、住民も商店など自営業者が多い。核家族化の進行と共に団塊ジュニア世代が地域を離れ、人口が急激に高齢化が進行している。

【困りごと】①高齢者の健康不安。②独居高齢者の増加。③高齢者の全貌が見えにくい。

【対象・参加者】民生委員、調査に賛同する方 延115名

【内容】地域課題を住民自らの手により洗い出し、改めてどこに問題があるのか、地域の人みんなで考え、解決に向けて取り組むきっかけづくりとする。(高齢者への聞き取り調査・結果からの意見出しワークショップ)

【講師】大学准教授、社会教育・生涯学習研究者

高齢者の声を拾う

住民自らの手により
課題の洗い出し

みんなで
対策を考える



地域の特色

勸興校区は佐賀市の中心地に位置し、歴史と伝統が育まれたまちである。以前は中心商店街として賑わいを見せた時代もあった。現在は人口移動や経済地図が変化するにつれて、その姿も大きく変化してきたが、依然として佐賀市あるいは佐賀県の中心地としての機能はしっかりと保持している。人口は6,484人、3,412世帯で、校区内自治会は22町区。(R3.12.31現在)



ここが POINT!

- ①調査によって公民館で取り組むべき課題を発見。
- ②3者協働することで調査は可能になる。
- ③孤立化を防ぐには高齢者が健康で集い語る場が必要。

成果

- イメージだけだった高齢者像が
実態として顕在化
高齢者問題が地域課題だと裏付けができた。
- 公民館が地域を再認識
地域の支援に複数の団体や大学が入り乱れて
いたのを整理し、相互の協力・連携をはかった。

その後 展開

高齢者の居場所づくり事業

高齢者を対象にした居場所づくり。

福祉系の団体との連携

支援者が健康で活動できる仕組みづくり。

元気高齢者の地域活動参加のすすめ

心身の健康と自分自身で見出した役割が活力となるようにする。

STEP UP!

高齢者が集まる居場所を公民館に作る あつまれ！水曜

最初は公民館主導だったが、ただ呼びかけただけでは人が集まらなかった。そこで、老人クラブ、介護支援サポーター、民生委員、おたっしや本舗、西九州大学と連携し、高齢者の居場所づくり事業として、当番制で開催。ものづくりやニュースポーツから、防犯・交通の講話などバラエティに富んだメニューを展開。現在は、勸興まちづくり協議会のすこやか部会主催となり、継続中。



大学生が主催したコットンパルンづくり
※高齢者を対象に毎月第1水曜日
10:00～16:00開催

結果的に

高齢者を孤立させない
事業が立ち上がった。

公民館応援団の育成

(地域活動をやってくれる住民の育成)

循誘では地域活動の参加や地域ボランティアも増加傾向にあるものの、特に市民性や主体性への意識が強いわけではない。これからは「地域で生きる」という意識を高め、住民が主体性を持ち、公民館活動にも積極的に参画する人材を育成したい。

【困りごと】自治活動を主体的にやってくれる人材が少ない。

【対象・参加者】YOU誘大学(高齢者学級)の受講者 延110名

【内 容】まちづくりの一步として、地域住民で「自分のため」「地域のため」にできることを考え、地域に関わることの大切さについて学び、当事者意識を芽生えさせる。

【講 師】大学教授

ボランティアの育成

公民館応援団を
作りたい

住民の
主体性を育む

佐賀市の中心部に位置する循誘校区。かつては佐嘉鍋島藩の城下町として栄え、江戸中期から明治中頃まで、佐賀で最も賑わいのある町だったと言われている。人口は8,725人、4,572世帯で、校区内自治会は20町区。(H4.2.28現在)

準備
期間

企画
会議

第1回

企画
会議

第2回

企画
会議

第3回

企画
会議

事前打ち合わせ

▼ 公民館との話し合い
地域の良いところ、困りごと、住民の雰囲気等、地域の全体像の把握。公民館では、今まで講座の準備やふりかえりをする経験がなかった。
※公民館とアバンセ(当時は2者)での講座。企画の共有。



講師と関わったスタッフ一同

▼ 目標の設定
講座終了後、どう展開していくか。

YOU誘大学(高齢者学級)生から

ボランティアの育成

あなたの手が魔法の手に

▼ 講義
「あなたの手が魔法の手に」地域活動の楽しさ等の講話で、住民のやる気を引きだす。



講座の様子

▼ 宿題「魔法の手」
この講座で学んだことをエネルギーとして、いろんな人に手渡す。まずは家族に。



ふりかえり・準備

▼ 気づき
受講者に、この地域に生まれてよかった育ってよかった住んでよかったと「幸せ」を感じてもらうことが公民館職員の「幸せ」。

▼ 反省
公民館職員同士の考えの共有化をはかる。

▼ 次回の準備
受講者の反応、感想を公民館で把握。それ踏まえて第2回の内容を検討。

▼ 次回の目標
地域と受講者の接点を知り関心ごとはどこかを探る。

▼ 『しあわせ通信』の発行
講座のふりかえりとして『しあわせ通信』を作成。公民館職員の想いも掲載。



おしゃべりにお茶とお菓子は大事

ここが
POINT!

- ① ボランティアの育成は簡単ではない。
- ② 講座の事前の打ち合わせや講座の間のふりかえりが重要。
- ③ 公民館職員の講座に対する意識の変化。

成果

- 学ぶ大切さを知る
公民館に集い自分や地域で、できることをみんなで考え、学んだ。
- 居場所作り
住民が自由に意見を言え、つながる場を公民館が新しく作った。

その後
展開

お茶ご会

気軽にお茶を飲みながら「フェイスtoフェイス」の仕掛けづくり。

幸せをみつける10カ条

▼ 講義
第1回のふりかえりと生まれ変わったら男?女?



講座の様子

▼ ワークショップ
自分のやりたいこと、夢10個を書き出す。自分の可能性、社会とのつながり、一緒に実現する仲間を発見する。



ワークショップで上がった夢の一部

ふりかえり・準備

▼ 気づき
参加型ワークショップへの抵抗感。地域の人は公民館応援団を望んでいない?

公民館の応援団は公民館の課題で地域の課題ではなかったことに気がつく。

▼ 内容の再検討
みんなでやったら楽しい、それが人のため、社会のために役立つことを学ぶ。

▼ 次回の目標
「幸せをみつける10カ条」を元に、できることを考える。

みつけられましたか? あなたの幸せ

▼ ワークショップ
「自分のためにできること」「子どもたちのためにできること」「地域のためにできること」をグループで話す。
気持ちを行動に移すための一歩とは?

ひとつでもいいからやってみる。



ワークショップでの発表

ふりかえり

応援団は作れなかったけど、話し合いで新たな発見や広がりを感じた。地域や公民館活動について自由に言える場「お茶」会の開催決定。

STEP
UP!

お茶ご会の話し合いから 公民館カレーの日 が生まれる

最初に公民館の主導で「公民館カレーの日」のやり方を見せ、徐々に公民館を利用する団体やサークル等へと運営を移行した。カレーの日の売り上げ(1杯200円)から材料費を除いたあと、主催した団体等の活動資金として使用し、団体等のモチベーションを上げる仕組みづくりを形成。その結果、公民館職員が異動しても住民の主体性に支えられ、継続ができています。作り手と食べる側にも会話が發生。地域における「フェイスtoフェイス」の仕掛けづくりにもなった。



※毎月10日に各地域の12団体等が持ち回りでカレーを作り、地域の誰でもが参加できる昼食会を開催。2013(H25)年度から現在も継続。

結果的に
住民の
自主的な活動に
つながっていった。



課題

水害の常襲地域

防災意識を高め、自分たちでできる防災を考える

橘は水害の常襲地域で、毎年大雨のときには幹線道路が冠水し、町内の交通が部分的に不通となる。そこで住民の防災意識を向上させ、まずは自分や地域でできることを学び、行動につなげるきっかけとする。

【困りごと】①日常的な道路の冠水。 ②災害に対する住民の意識が低い。 ③高齢者世帯の増加。

【対象・参加者】区役員、民生委員、各種団体の方、及び関心のある方 延290名

【内 容】災害は身近なものだと知る。まち歩きをしながら避難通路の確認や地域の危険箇所がわかる防災マップを作成する。防災に対する共通認識を持つことで、将来的には自主防災組織体制の確立を目指す。

【講 師】河川事務所建設専門官、コーディネーター

目標

地域でできることを学び 行動につなげる



危険箇所を点検しながらのまち歩き

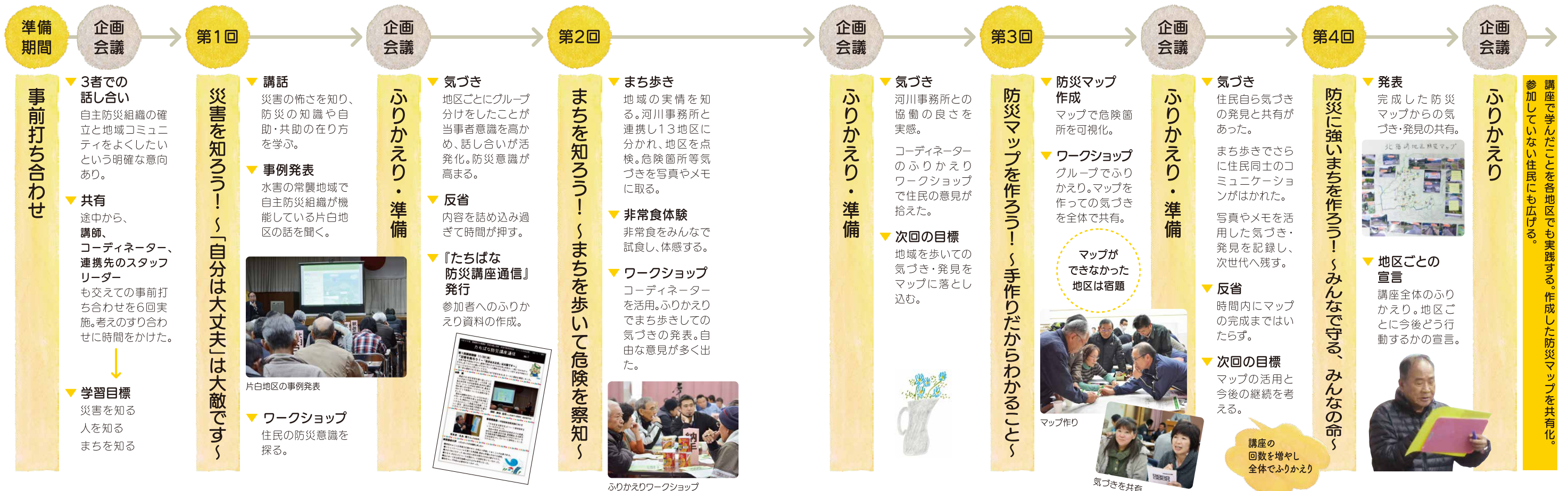
地域を知る

防災意識の
向上



地域の特色

橘町は武雄市の南部に位置し、六角川の上流潮見川流域を中心に、武雄市最大の水田が広がり、東西を低い山に囲まれた町である。農業を主産業として栄えてきたが、社会の変化と町の中央を横断する高速自動車の開通により、近代的な様相が一変してきている。人口は2,387人、835世帯で、町内自治会は13町区。(R4.2.28現在)



ここが
POINT!

- ①講座で地域や人を知り、住民自ら気づき・発見をする。
- ②地域課題を多くの住民で考えるとその場で共有ができる。
- ③国、県、市が協働で事業を実施。



初めての試みとして
カフェコーナー設置

成果

- 集って話し合う大切さを知る
地域のみんなが集まって話し合う、大切さを知ることができた。
- 意識の変化
住民も職員も、地域課題への取り組み方について意識変化がみられた。

その後
展開

防災の3年計画

県の助成金を利用し、防災講座の開催。市との連携で、防災訓練の実施。自主防災組織の確立。

STEP
UP!

計画の実施

県まなび課の助成金を利用して、防災講座を開催。防災マップを製本して、各戸配布。自治公民館にもA1サイズで配布し、掲示。市防災減災課と連携し、防災訓練の実施。各自治公民館から防災マップの避難経路を通して、再び自治公民館に集合。自主防災組織の確立。当初の3年計画に基づき、実践ができた。



その後も防災訓練が続いている

結果的に

防災講座の活動が認められ
文部科学大臣
優良公民館表彰に
輝いた。

自分たちで出来るまちづくり

基山でもさまざまな共同体が姿を消し、住民交流の場も減少している。また、地域活動への関心の低下は、今後の自治会運営が不安視される。そこで、住民が行政との協働のあり方を理解し、自らの意思で地域活動に取り組むことをめざす。

【困りごと】①共同体の減少による、住民の交流の場の減少。 ②自治会活動の高齢化。 ③中心街店舗の閉鎖。

【対象・参加者】第3区自治会(以下3区)の住民および関心のある基山町民 延70名

【内 容】まちなか公民館を使って、活動への一歩を踏み出すための仲間づくりを促し、住民主体のまちづくりに大切なこと、自分たちで出来るまちづくりのカタチについて考える機会を提供する。

【講 師】地域づくりコーディネーター

まちづくりを学び 活動する仲間を見つける

一緒に
語り合おう!

行動しよう!



基山町は17区の行政区に分かれている。その中心に位置している第3区自治会。JR基山駅周辺の地区として宅地開発も行われたが、地域を通る長崎街道には、今も昔の面影を感じさせる伝統的建築物が残っている。人口は1,404人、545世帯。(R4.2.28現在)



- ①まち歩きでまちの魅力や面白さを再発見。
- ②自分の関心事を物語にする。
- ③地域への愛着心が地域活性化へのきっかけを育む。

- 地域活動のやり方や人との関わり方を学べた
まち歩きを通して、みんなで学ぶ楽しさを体験。住民の意識が高まった。
- 新たな「集いの場」の発見
「まちなか公民館」の存在と駐在するスタッフとの出会い。

まち歩きに参加した受講者

町のまちづくり基金事業を活用し、防災訓練等の活動に取り組む

3区の自治会で防災学習に着手

2016(H28)～2017(H29)年度の2ヵ年、まちづくり基金事業を活用した取り組みを行った。講座に参加していた地域役員を中心に活動を展開。

職員相互のスキルアップ

基山町役場職員(まちづくり課担当職員)が、アバンセ職員や県内の社会教育・公民館職員と共に「学びを通じた地方創生コンファレンス」(文部科学省委託事業)に2016(H28)年度から2ヵ年参画。

やればできる!
という自信が芽生え活動を後押し
現在も第3区自治会での
防災研修は継続中。



コンファレンスメンバー

まちづくりを担ってきた世代の疲弊

中川副は、老人会やまちづくり協議会などの地縁活動等に協力的なまちである。しかし、地縁を支える住民は高齢化が進み、地域活動が活発であるがゆえに疲弊していくことが懸念される。

【困りごと】①老人クラブの加入者の減少。 ②地域活動を支えてきた住民の高齢化。 ③地域活動の後継者問題。

【対象・参加者】自治会役員、まちづくり協議会(以下まち協)、老人クラブ、中川副住民等 延142名

【内 容】地域活動を続けるための基本となる健康な暮らしを提案し、自発的な活動への意欲を高め、公民館を核として地域活動団体が連携する機会を提供する。

【講 師】大学教授(支援:健康体力づくり団体)

アクティブなシニアづくり

健康な暮らしについて学ぶ

まち協部会間の連携



地域の特色

中川副校区は筑後川流域の町。豊饒な佐賀平野では、農業と有明海苔の養殖が行われている。町の中心には、郷土の偉人「佐野常民」の教えを伝える佐野記念公園がある。記念公園には、明治日本の産業革命遺産の一つである三重津海軍所跡があり、世界文化遺産に登録されている。人口は2,899人、1,277世帯で、校区内自治会は16町区。(R4.2.28現在)



ここが
POINT!

- ①仲間と楽しい時間を過ごすことがまちづくりには大事。
- ②健康がテーマだと関心が高く、活動に参加しやすい。
- ③健康と郷土愛(まちの歴史)を結びつけ、まちづくりを意識させる。

成果

- 課題解決の手法が増える
健康をキーワードにした課題解決の手法のひとつを見つける。
- まち協の歴史・伝統部会と健康・福祉部会の連携
歴史とウォーキングを融合させることで連携がはかれた。

その後
展開

「元気で長生き大作戦! in 中川副」を合言葉に講座やウォーキングを継続する

STEP
UP!

「元気で長生き大作戦! in 中川副」を継続

2017(H29)年度も「元気で長生き大作戦! in 中川副」の講座を開催。その後、健康・福祉部会で万歩計をつけて「北海道まで行こう」と名付けてウォーキングを継続。歴史・伝統部会とのコラボも継続。

2021(R3)年3月に中川副まち協が「中川副歴史探訪ウォーキング」を発行。



2021(R3)年度森林公園をウォーキング

結果的に

「元気で長生き大作戦! in 中川副」大成功!
現在も継続中

桜岡では、小・中学生の保護者を主な対象として、青少年の健全育成に関する研修会を年1回研修をしているが、本来参加してほしい保護者の参加が少ない。また、少子高齢化の中で住民のつながりが希薄化していることも課題。

【困りごと】①青少年を対象にした事業に子育て世代の参加が少ない。②地域での一体感がない。③地域に愛着心がない。

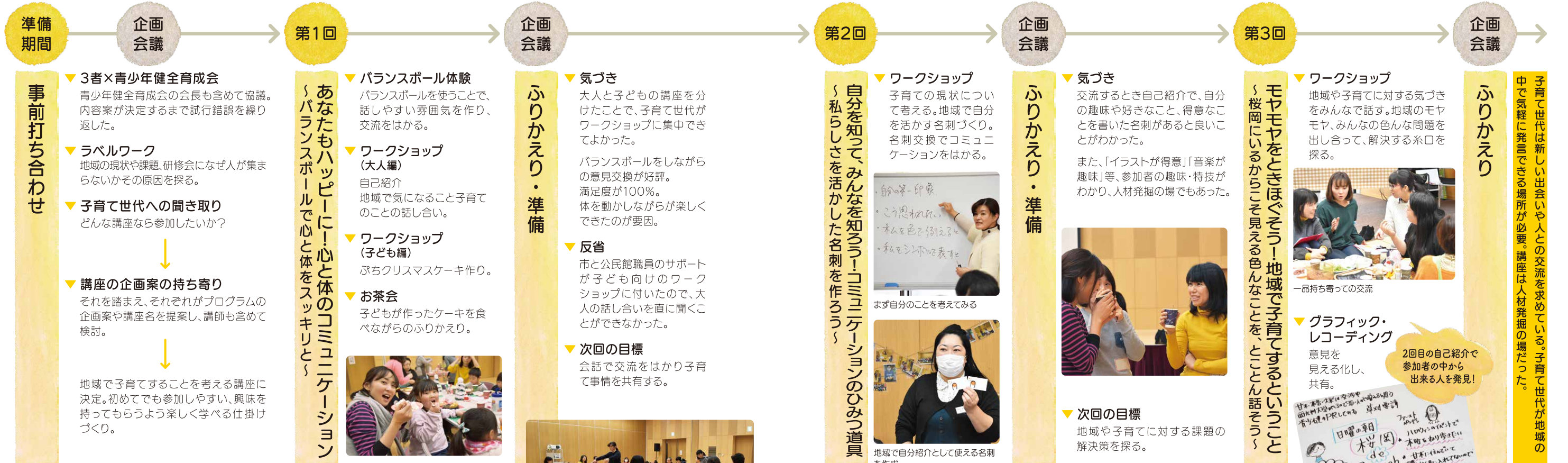
【対象・参加者】桜岡校区の小・中学生の保護者、桜岡地区青少年健全育成会役員及び関心のある方 延48名

【内容】地域住民同士のコミュニケーションを図るとともに、参加者の会話の中からニーズを引き出し、「これからの地域で子育てをすること」について考える。

【講師】大学准教授

地域の人との
交流

子育て世代の
ニーズの把握



ここが
POINT!

- ①子育て世代が地域で気軽に語り合う場が必要。
- ②講座は地域の人材発掘の場。
- ③子育て世代の参加を促すには、興味を引く仕掛けが必要。(子どもの預かりも工夫)

成果

- 子育て世代が地域でできることを認識
子育て世代で地域に語り合いの場ができないか考えるきっかけとなる。
- 地域の人と交流することでつながりができる
自己紹介の名刺で特技や好きなことを知り、人がつながりやすくなる。

その後
展開

「Bar真理子」が誕生

地域交流の場。小城市内で毎月1回開催。

「桜岡de ブランチ」が誕生

日曜日の朝、親子でご飯を食べながら、地域で子育てをテーマに交流する。毎月1回開催。

STEP
UP!

Bar 真理子

※市民の出会いの場とまちの活性化を目指す異業種交流

噂を聞いて小城市外の人に参加することも。場所も小城市を飛び出し、市外で開催したこともある。2019(R元)年3月よりコロナ禍で一時休止。2020(R2)年11月に小城駅で再開したが、再びのコロナ禍で休止中。

ま・まんでいカフェ

※桜岡deランチから名前を変更

桜岡支館と桜岡青少年健全育成会の協力の元、毎回地域や子育てに関するテーマを出し意見を拾い、支館と育成会へフィードバック。その後リニューアルし、子どもに関わる全ての大人の居場所づくりの団体が引き継いで、現在も継続中。

結果的に

地域交流と
子育てを考える
場ができた。

桜岡青少年健全育成会も
子育て世代に周知できた。



2018(H30)年度 Bar真理子

子どもをサポートする ボランティアの育成

有田では「子育てする幸せ」を念頭に、子どもたちとともに学び楽しむ地域づくりを目指しており、子どもサポートの担い手となる人材の発掘に取り組もうとしている。しかし、まだ積極的に支援者になってくれる人材が少ない。

【困りごと】①放課後子ども教室の支援者がほしい。 ②人材発掘に苦慮している。ボランティアの育成は難しい。
③親子で遊べる場所がほとんどない。

【対象・参加者】子育てや地域活動に関心のある方 延60名、「わくわく子ども横丁」参加者183名

【内容】支援とはどのようなものかを学ぶ機会を作り、子どもを対象としたイベントを受講者で作りあげることで、支援のやりがいや楽しさを実践してもらう講座を実施する。

【講師】地域づくりアドバイザー



- ①企画づくりを学び、講座の中でイベントを実施。
- ②イベントの成功体験が受講者のモチベーションのアップ。
- ③大人と子どもの交流の扉を開いた。

- 意識変化 受講者に子ども支援に対するやりがいを感じてもらった。
- 親子で遊べる場の創出 年に一度ではあるが、公民館に親子が集まる場を作れた。

「わくわく子ども横丁」の継続
公民館はこの「わくわく子ども横丁」に手応えを感じ、次年度も継続していくこととなった。

「わくわく子ども横丁」

公民館は、2019(R元)年度に有田町生涯学習課と連携し「わくわく子ども横丁」を開催。前年度のプログラムをそのまま継続するのではなく、様々な団体と連携し新しく自分たちでできることにも取り組む。子ども支援者も若干ではあるが、増加しつつある。
※2020(R2)～2021(R3)年度はコロナ禍で中止。



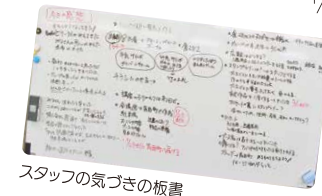
2019(R元)年度「わくわく子ども横丁」の様子

放課後
子ども支援
サポーターの
人材発掘に
つながった。

放課後子ども教室の サポーターの スキルアップ

支援の
あり方を学ぶ

わくわく
子ども横丁
の実現



スタッフの気づきの板書

有田町は、佐賀県の西部に位置し美しい景観を誇る田園地帯や黒髪連山など、豊かな自然に恵まれた温暖な気候の地域。有田焼の「器」と農業の「食」、両方の魅力を堪能できる町である。伝統と歴史、豊かな観光資源を生かしたまちづくりに取り組んでいる。面積は65.85km²で、人口は19,219人、7,783世帯で、自治会は49地区。(R4.2.28現在)

地域の魅力を再発見して、次世代へ継承

能古見を
もっと好きになる
大作戦

能古見は地域のほとんどが山林のため、近年、若い世代は生活の利便性が高い市の中心部に住む傾向があり、子どもの数も減少している。また、地域には多くの歴史的遺産や碑等が点在しているが風化しており、それらの保存や継承が危惧されている。

【困りごと】①地域の歴史や文化の伝承が廃れつつある。 ②次世代に能古見のことをもっと知ってほしい。
③公民館にもっと地域住民が集まってほしい。

【対象・参加者】能古見地区の住民延121名(内、能古見小学校の3年生29名)

【内 容】地元住民一人ひとりが地域のことを「自分ごと」として捉え、みんなで集まって学び、交流を深めながら、地域のことやまちの宝を再発見・再認識する。また小学校と連携することによって、それらを子どもたちに伝承し、地域づくりに活かすきっかけとする。

【講 師】市民図書館職員、生涯学習課職員、地区振興会役員、ドローン操縦者

地域のお宝再発見

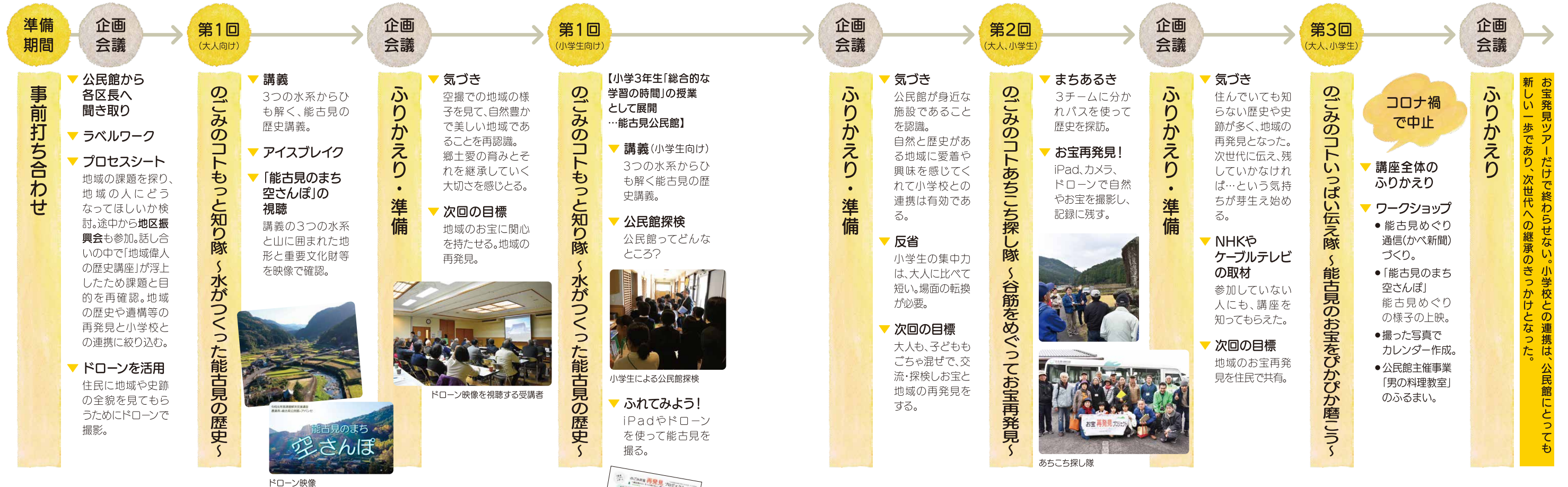
次世代への
継承

公民館に
集い、学び、
交流促進



地域の特色

能古見地区は、中川水系・黒川水系(浅浦筋)・石木津川水系(山浦筋)の3つがあり、地域に豊かな美りをもたらしてきた。総面積は鹿島市の半ば近くを占め、その90%は山間部に属している。山間部には高齢者のみの世帯も多い。高齢化率約35%。また城址や寺社などの歴史も深く、面浮立や鉦浮立、獅子舞などの伝統文化も受け継がれている。人口は3,253人、1,140世帯で、6ブロック23区。(R4.1.31現在)



- ①ドローンやiPadを使い、地域の自然や歴史と結びつけ、興味を持たせる。
- ②歴史講座には人が多く集まるが、地域づくりに活かす仕組みづくりが必要。
- ③小学生の公民館体験は、どの地域でもすぐに取り入れることができる。

- 小学校との連携で次世代への継承のきっかけとなる新しい機器を使用し、地域の歴史やお宝に関心を持たせ、次世代へ継承。
- ドローンで撮影した映像が地域学習の教材へ地域学習の新しい手法となり、映像は地域のお宝になる。

「のごみ★お宝再発見プロジェクト」の継続

のごみ歴史巡りウォーキング

公民館は、課題解決支援講座からの継続事業として、2020(R2)年度に市生涯学習課と連携し、職員を講師に「のごみ歴史巡りウォーキング」を開催。

のごみ★お宝再発見プロジェクト

教育委員会は、2020(R2)年度に小学校と連携して小学3年生を対象とした「のごみ★お宝再発見プロジェクト」を開催。壁新聞を作成し、成果発表を行った。2021(R3)年度も継続。

「能古見を もっと好きになる大作戦」
着々と進行中!



2020(R2)年度「のごみ★お宝再発見プロジェクト」

地域のつながりをつくり 住民の参画を促す

鳥栖地区まちづくり推進協議会(以下まち協)は、事業に対する前向きな意欲はあるが、盛りだくさんの事業をしていたため、事業の点検・精査が十分にできず、マンネリ化や疲弊感が募っている。そこで、まち協同士のコミュニケーションを再構築し、住民に活動を知ってもらい、地域活動に参画する機会をはかる。

【困りごと】①地区全体が一体となって取り組む機会がほとんどない。②まち協の活動のマンネリ化。

【対象・参加者】まち協、鳥栖地区地域住民 延204名

【内容】地区全体の住民ができるイベントをまちづくり推進センター(以下センター)とまち協が主体となって再考し、新しい枠組みをつくる講座を実施する。(※センターはまち協の事務局を兼ねている)

【講師】地域デザイナー

自走できるまちづくり

まち協の
再創造

センターの
地域交流の
拠点化



地域の特徴

鳥栖地区は鳥栖市の南東部に位置し、駅前の商業地や歴史的な長崎街道、工業団地、田園風景などが共存し、流通の拠点として、古くからの住民はもちろろん、県内外からの転入者や外国人も多く、人も町も多様性に富んだ地域である。高齢化、人口減少の課題がない町。人口は約11,950人、5,465世帯で、校区内自治会は14町区。(R3.12.31現在)



ここが
POINT!

- ①意見が言いやすい場の創出で、まち協が変化。
- ②企画の立て方や運営の仕方等の学びの機会となる。
- ③センターに人が集まるきっかけとなる。

成果

- まち協の再創造のきっかけができた
企画からのイベント成功体験がまち協のやる気につながり、意識が変化。
- 連携により地域活動での協力体制が生まれた
連携することで出来ることの幅が広がった。

その後
展開

「とすまちもちまつり」の継続
手応えを感じ、次年度も継続していくこととなった。

STEP
UP!

まち協の話し合いの場
が劇的に変化

それまでほとんど意見が出ない状態だったが、活発化し誰でも意見が言える場となった。また、各団体や事務局とまち協のつながりも前進した。



まち協の会議の様子



もちまつのボランティアスタッフ
この他にも消防団、おやじの会等が協力

「とすまちもちまつり」2020(R2)～2021(R3)年度は
コロナ禍で中止。

地域の未来が心配

大人や子どもの本音が知りたい

大良の住民は、協力的で何事も引き受けて取り組む人が多い一方、本音を言えているのか不安。将来的に小学校の統廃合が見込まれる中、今は元気だが、地域の未来について、住民同士が本音で話し合い、考えることが必要である。

【困りごと】①地域の将来的な人口減少、過疎化への不安。(小学校統廃合) ②一部の住民の声しか聞けていない。
③住民間で年代、家族環境等による考え方や意識の違いがある。

【対象・参加者】大良地区に在住の方(公民館運営審議委員、育友会、子ども教室サポーター等) 延120名

【内容】住民が参画しながら意識調査を行い、地域の実態やニーズを顕在化させ、住民全体が共通認識を持つことで、これからの大良の在り方や未来像を考える機会となる講座を実施する。住民へのアンケート調査、小学校とも連携。

【講師】社会教育・公民館勤務経験を持つ市職員

住民の本音が言える場づくり

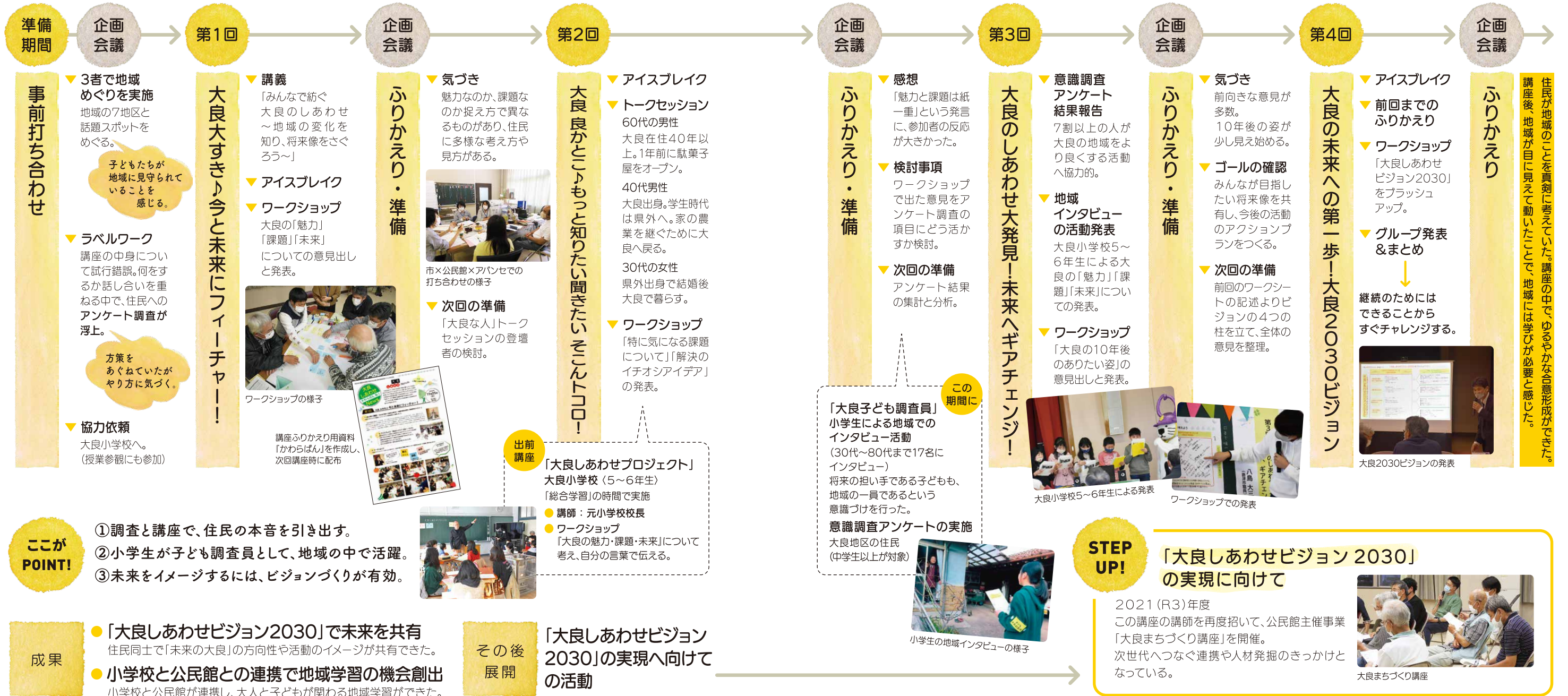
アクションにつなげる

地域の未来ビジョンを作成



地域の特徴

大良地区は、唐津市の西方上場台地に位置し、山に囲まれた自然豊かな土地で、ハウス栽培や畜産業など、農業を基幹産業とする農村地帯。約8割の世帯が農業(兼業含む)に従事。地区全体の人口は減少傾向にあり、2012(H24)年度末に大良中学校が閉校となった。公民館に隣接して、保育園と小学校がある。人口は約600人、世帯数は147世帯。7地区。(R3.3.31現在)





ワンポイント・アドバイス

ここからのページは、今まで行ってきた課題解決支援講座から共通するキーワードを抽出し、そこから見えてきたことを紹介します。

31

ワンポイント・アドバイス

ワンポイント・アドバイスとは

ワンポイント・アドバイスは、10年間にわたる取り組みの中から、共通項としてみえてきたことを順番に挙げてみました。確かな根拠に基づいてというよりも、10年間にわたって取り組んできた経験を整理してみると、こんな点が重要だったのではないか、という経験則から導き出されています。

公民館には、マニュアルがありません。なぜかという、公民館活動はそれぞれの地域の伝統や文化に規定されて活動が生み出されているので、学校のように全国共通した学習指導要領を作ることが難しいのです。仮に作ったとしても、うまくいかないでしょう。学習内容や方法、形態など、それぞれの公民館で生み出していくしかありません。

ところが、問題もあります。「地域課題解決支援講座をそれぞれの公民館でやって下さい」と言われたとき、皆さんは何を頼りにされるでしょうか。市町の教育委員会ですか、それとも公民館の前年度の取り組みでしょうか。おそらくどちらもですね。ですが、市町村合併後、市町教育委員会はとても忙しく、また経験をもった職員が減り相談体制が弱くなってきました。前年度の事業を参考にしようと思っても、地域課題解決支援講座は初めての取り組みなので、どうしたらいいか見当が付きません。

これではやろうと思っても、なかなか手が付けにくいということになってしまいます。地域課題は

山積みです。山積みだけど、できないのかもしれない、と考える教育委員会や公民館もあるでしょう。しかし地域には人が住み続けています。背を向けていられない現実も一方であります。

そんなときに、本に掲載した事例とワンポイント・アドバイスを参考にしてほしいのです。ここに掲載した事例は、県内のどこにでもあるような公民館の事例です。協働したアバンセのスタッフもどこにでもいるような職員たちです。掲載した事例は、どこの公民館でも、少しの工夫と努力でできるものばかりです。だから心強いのです。地域課題と向き合うときに、背中を押してください。

どこの市町教育委員会でも公民館でも、意欲さえあれば誰でも取り組むことができる。地域で暮らす人たちと一緒に人々の幸せと暮らしやすい地域をつくっていく。地域づくりはたしかに難しいけれど、課題解決支援講座は想いがあればできる。そのとき、この点だけは大切にしてほしい、という想いをこめたワンポイント・アドバイスです。



32

ワンポイント・アドバイス

6つの抽出された項目

経験則から抽出された項目は、6つありました。

①【交流づくり】

一番大事なことは、コミュニケーションが取りやすい場を作ること。

②【調査】

調査は難しい。でも協働することで実現し、課題発見に活かすことができる。

③【まちあるき】

ただ歩くだけではない。目的をもってまちを歩くと、思わぬ気づきや発見がある。

④【祭り・イベント】

祭り・イベントの存在の意味って、考えたことがある!?

⑤【防災】

防災はまちづくりには不可欠。だからこそみんなで考え行動できる課題。

⑥【子ども・学校連携】

子どもの存在を意識することで、地域の未来の芽がふくらむ。

これらの6つは、31のケースの中から抽出したものです。振り返ってみると、どこの地域、どこの公民館でも「交流」を大切にされています。かつてやられていた住民間の「交流」を再生させることができるように工夫しようという試みが随所に見られます。「交流なくて講座なし」という表現は、講座そのものが、交流を促進する役割を果たしているという意味あいも込められています。

次は、「調査」と「まちあるき」です。これは地域を知る活動です。意外と知っていそうで知らない

のが、地域です。長く住んでいるからといって自然と地域のことがわかる、というわけではありません。知らないお店ができた、新しいアパートが建っていたり、住む人も変わってきています。住んでいる人の気持ちがわかるような「調査」は、講座を実施するときの重要なアイテムです。定期的に取り組んでみるのも一考です。

「まちあるき」は、自分たちの住んでいる地域がどんなところだろうという、参加者による探索活動です。「まちあるき」は、どんなテーマであってもやってみたい、という気持ちになります。参加者の皆さんは、地域のことを知りたいのです。最近は歩くだけではなく、カメラやスマホ、タブレット、ドローンなどの新しいツールを活用して歩いたり、探索したりすることができます。

「祭り・イベント」や「防災」は、いろいろあるテーマの一つです。ですが、地域の文化や、住民の暮らし・安全全般に関わるテーマです。とくに近年、九州では水害が毎年のように起こり、命を守る講座になっています。多くの関係機関と協力できる分野でもあります。

「子ども・学校連携」は、地域では子どもの存在は重要です。子どもは未来の地域の担い手なのです。ですが、意外と抜け落ちがちです。地域や公民館は、どれだけ子どもたちの声を聴いているのでしょうか。また公民館と学校との連携関係を知る指標にもなります。

交流づくり

交流で一番大事なことは、
コミュニケーションが取りやすい場を作ること。

交流なくして、講座なし

交流は講座にとって不可欠なものです。交流は、もっともプログラムの中で気になければいけないところ
です。今まで開催した31ヵ所全講座では、プログラムの中になんらかのカタチで交流をはかっています。講座
の企画を立てるときに、講師ばかりに目がいき誰にお願いしようかとあれこれ頭を悩ませますが、その前に
どうしたら住民同士が気軽に交流できるかを考えることはとても重要です。人が集まれば自然と交流が生まれる
というのは大間違いなのです。

緊張感を和らげる交流とは…

最初は、座学中心でワークショップのみで交流をはかろうと試みました。ワークショップは、初めての人同士
もグループに分かれ意見出しをするので、緊張感を取り除くためにアイスブレイク(場を和ませるクイズや
ゲーム等)を取り入れたところ、みんながいきいきとし、ワークショップで交流する楽しみを講座に見つけて
来られる(春日)ようにもなりました。このように、職員も交流を促すスキルを身につけ、普段からコミュニ
ケーションをはかれる場をつくることは大事なことです。

交流はバリエーションが豊富、距離も縮む

2013(H25)年度頃から、もっと気軽に交流をしてほしいとの考えから、カフェコーナーを設置し、休憩時間
にお茶を飲みながら交流を始めました。参加者のみなさんがホッとされるのか、講座の中では出なかった本音
トークが飛びすこともありました。その後、まちあるきやイベントの中で、食生活改善推進員や男性の料理教室
等の協力を得て、ぜんざいや豚汁、カレー等を食べながらの交流が広がりました。一緒に行動したあとは話も
弾み、人と人の間の距離がぐっと縮みます。講座終了後に継続のひとつの方法として、お菓子とお茶を用意して
のお茶ご会(循誘)を開催したところもありました。

ここが ポイント

- ① 講座の中で一番大事な交流。
- ② 交流を生むスキルを身につける。
- ③ 講座のプログラムに交流を組み入れる。
- ④ 交流から始まる風通しのいい地域づくり。

プログラムの中に交流を組み入れる

場を和ませ盛り上げる手法のひとつとして、講座のプログラムの中に食べものを介するという企画があり
ます。一品持ち寄りの「Bar洋子」を参考にした「桜岡deランチ」(桜岡)や持ち寄りパーティーのポットラック
(東山代)です。初めて同士でも、食べ物があると「美味しい!これどうやって作るんですか?」と自然に会話が
弾み、わいわい盛り上がります。その勢いのままワークショップをすると、おしゃべりの延長みたいな感じで、
アイデアがどんどん溢れ出していきます。プログラムの中に交流を組み込むこともひとつの手です。

交流から課題解決の力が生まれる

講座の中での交流がうまくいくと、その後も地域の中で会話が生まれ、つながりができてきます。地域の中に
つながりができると、いろんなところで連携がしやすくなります。また、課題解決につながるアイデアも、いろ
んな人の意見が混ざり合うことで、解決方法もひとつだけではなく、複数生まれてくることもあります。地域活動
をする上では、参画者が多ければ多いほど活動が活発化し、地域も活性化していくので、交流がもたらす力が
課題解決の力と言っても、言い過ぎではありません。だからこそ、交流を重要視したプログラムづくりが大事と
言えるのです。

調査は難しい。

協働でやるからこそ、実現できる。

調査活動をするのが課題発見につながる

課題を見つける方法のひとつとして、調査があげられます。調査は地域の声を拾って課題の発見につながる有効な方法です。調査を実施する地域は、公民館や自治会が地域のニーズをつかみづらくなっているところが多いようです。高齢化の課題を地域全体で考えたい(勸興)、新しい住民が急速に増え、これからの地域活動のあり方を探りたい(江北)、みんなの声を活かした地域の未来像を作り上げたい(大良)というように、調査活動をすることで、まずは住民の気持ちを知ることから始めていきます。

講座の中で調査の意義や方法を学ぶ

「講座で調査をやりたい」と聞いたとき、講座の中でどうしたらできるのでしょうか。まずは、調査について学ぶプログラムが必要です。最初に調査の意義を学ぶことから始め、みんなで思いをひとつにします。次に、住民に聞き取り調査をするときに大事なロールプレイの演習、住民が調査でどんなことが聞きたいか意見出しをするワークショップ等を行います。出された意見を基に調査票を作成し、講座と講座の間に調査を実行します。調査の分析には専門家の力も必要です。その後、分析した結果をみんなで共有し、地域の課題は何かを探っていきます。

次世代の参加を考えることも大切

調査は、回数を重ねるごとに住民自身がまちの課題を検討し、その結果から課題解決へ向けた方策を考える一連の学びのストーリーができます。自分たちで課題解決ができる道筋がわかるというんな課題に対応でき、継続が期待できます。大良では、小学校と連携し「子ども調査員」として、子どもが大人へ地域について聞き取り調査を行いました。自分が住んでいる地域を知るとは、子どもにとっても地域社会の一員であることの自覚を促し、郷土愛を育む機会となります。また大人も、子どもの気づきや発見にモチベーションが上がり、やる気が引き出されます。これが地域の未来を真剣に考えるきっかけとなります。

調査はその後の展開も重要

調査を実施するには住民の協力なしにはできません。調査票を配布したり集めるのに、地区の役員にお願いすることも多々あります。それには日頃からの関係性も大事です。また、調査内容の検討からデータの集計・分析までには約半年ほどかかります。その間、住民にいかにもこの調査に参画してもらうかが重要です。自分たちが作った調査である意識が高くなり、その後の展開も自分ごととして捉えることができます。調査することだけが目的ではなく、調査で課題を発見したことを住民みんなで共有し、どう取り組んでいくかをしっかりと考えることが大切です。時間はかかりますが、それが地域の財産となります。



- ① 住民の声が反映され、課題を発見しやすい。
- ② みんなでやるのが大事。専門家の力を借りることも大切。
- ③ 子どもが参加することで、大人のやる気を引き出す。
- ④ 住民関わった調査は地域の財産となる。

調査を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2012(H24)年度	勸興公民館	佐賀市	高齢者の暮らしを考える
2017(H29)年度	上分区	江北町	上分区意識調査 発掘!あるある上分区
2020(R2)年度	大良公民館	唐津市	大良しあわせプロジェクト

P11へ
事例 01

P29へ
事例 10

CATEGORY

03

まちあるき

ただ歩くだけではない。目的を持って
まちを歩くと、思わぬ気づきや発見がある。

地域を知り交流が生まれる

まちあるきのいいところは、地域のことを知るきっかけとなり、課題の再発見につながりやすいことです。地域を歩くことで、人と人の距離感が縮まり、知らず知らずのうちにしゃべりをし、知らない人同士でも交流が生まれやすいです。知らないことを知っている人から話を聞いて、気になるところの写真を撮ったり、メモをすることで、そのあとのマップ作り(まちの魅力マップ、お宝マップ、ウォーキングマップ、防災マップ等)や、公民館に掲示する壁新聞づくり(まちあるきで気づき・再発見したことを書き出したもの等)にも活かされ、プログラムの幅が広がります。

進化するまちあるき

まちあるきは地域を点検することから始まります。ただまちを歩くだけでなく、課題に合わせていろいろなプログラムを展開することができます。各地域での取り組みも、地域の良さを発見(開成)、安全・安心なまちづくり(春日北)、まちの物語を紡ぐ(基山)、健康づくり(中川副)、次世代へ引き継ぐきっかけ(富士、能古見)、まちの危険な場所や避難経路の確認(防災のまちあるき)などがあります。最初は、地域の良いところ探しから始まったものが、年月を重ねていくうちに、地域を次世代へ引き継ぐ手法のひとつとしても、有効であることがわかってきました。

でも落とし穴もある

ただし、気をつけて欲しいことがあります。まちを歩いて成果物(マップや壁新聞等)を作りあげると、そこで達成感や終了感が生まれ、次の展開へとなかなか進まない傾向に陥ります。課題解決支援講座は、成果物を作ることが目的ではなく、住民自らが地域の課題に気づき、その解決方法を学ぶ場なのです。目的を見失わず、まちあるきをすることで何が得られるのか考えて、プログラムを作成します。そして、そこから気づき・発見したものを今後、どう地域に活かしていくのか継続方法を考えることが一番大事です。成果物はあくまで副産物であることをお忘れなく。

ここが
ポイント



- ① まちあるきは、地域の課題を見つけやすいツールである。
- ② 地域の特色を活かしたプログラム展開ができる。
- ③ 気づきや発見が課題を解決するきっかけとなる。
- ④ 次の展開も考えておくと、落とし穴にはまらない。

まちあるきを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2013(H25)年度	開成公民館	佐賀市	地元を知ろう I ♥(アイラブ)開成
2014(H26)年度	春日北コミュニティセンター	佐賀市	今こそ、その時!みんなで考えよう 安心して暮らせるまち春日北
2015(H27)年度	富士生涯学習センター	佐賀市	ふじくらしのススメ
2015(H27)年度	第3区自治会	基山町	まちを歩いて笑顔(しあわせ)探し
2016(H28)年度	中川副公民館	佐賀市	元気で長生き大作戦!in中川副
2019(R元)年度	能古見公民館	鹿島市	のごみ★お宝再発見プロジェクト

P17へ
事例 04

P19へ
事例 05

P25へ
事例 08

防災でまちあるきを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2012(H24)年度	兵庫公民館	佐賀市	兵庫町「地域防災」講座
2013(H25)年度	鍋島公民館	佐賀市	やられる前の防災学
2014(H26)年度	神野公民館	佐賀市	防災アクションことはじめ
2014(H26)年度	橘公民館	武雄市	たちばな防災講座
2015(H27)年度	南多久公民館	多久市	南多久地域防災力アップ講座
2016(H28)年度	東脊振公民館	吉野ヶ里町	「防災」話していますか?もしもの時のこと
2016(H28)年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO!で成和でGO!成和の防災!あそぼ~さい!

P15へ
事例 03

祭り・イベント

祭り・イベントの存在の意味って、考えたことがある!?

つばやきから地域課題を見つける

何気ない会話のつばやきの中に地域の課題が潜んでいることがあります。「祭りがなくなった」(東唐津)、「まちに親子が遊んだり集う場所がない」(2018年当時)(有田)「地域みんながひとつになる仕掛けが欲しい」(鳥栖、西川副)、「祭りを見直したい」(武内)という、職員のつばやきから課題を抽出し、自分たちに何ができるかを考えていきます。公民館やセンターを拠点とする新しい祭りやイベントを開催するまでの企画や運営の仕方の学びがこの講座から生まれました。

なんのためにするの?

祭りやイベントがなくなって初めて「なんか寂しいね」「みんなで集まることがなくなったね」という言葉を耳にしたことはありませんか?たくさんの住民が集まって一緒に計画から準備、実行をするものは他には見当たりません。でも「時間を取られる」とか「関わる人の負担が大きい」とか疲弊感もよく耳にします。そのために課題解決支援講座では「なんのために祭り・イベントをするのか」そこから学びを重ねていきます。いろんな多世代の人の考えや意見を聞いて一緒に課題を考えることは、チーム感が生まれ案外楽しいものです。地域にも知り合いが増え、次の講座が待ち遠しくなります。

企画から実現への成功体験が継続へ

ひとりで祭り・イベントを創り出すということは至難の業ですが、みんなで「祭り・イベントで何ができるか?」と考えると、時間が足りないくらい意見があふれ出します。そこにはその地域らしいアイデアのかけらがいくつも生まれます。次にそのアイデアのかけらをどうしたら実現できるか、知恵を絞ります。講座では、祭り・イベントの企画の立て方、連携の仕方、実施までの準備等を経験することと、当日の参加者の喜ぶ笑顔を見ることで、何ものにも代えがたい成功体験となり、次の展開へと事業が進めやすくなります。

コロナ禍でもピンチをチャンスに変える

2020(R2)年度はコロナ禍の中での講座開催でした。武内では課題解決のきっかけとなるような祭りの企画の作り方をワークショップで何回も重ねてじっくり学び、その後、武内町すみよいまちをつくる会の「おまつり部会」へと引き継がれました。西川副では公民館を舞台に、西川副を音楽発信のまちとして、みんながひとつになるような手づくりの音楽祭を開催する予定でしたが、コロナ禍でオンラインコンサートとなりました。ピンチが新しい手法を生む展開となり、公民館からこの講座をYouTube配信し、参加していない人にも見てもらいました。

ここがポイント

- ① 何気ないつばやきを見逃さない。
- ② 講座の中で、課題の意義と解決方法を学ぶ。
- ③ わくわく感や充実感講座の中から生まれる。
- ④ ピンチはアイデアを生むチャンス。

祭り・イベントを実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2017(H29)年度	東唐津公民館	唐津市	東唐津あかりプロジェクト
2018(H30)年度	有田町公民館	有田町	遊びの楽校(がっこう) in 有田
2019(R元)年度	鳥栖まちづくり推進センター	鳥栖市	みんなでつくる「とすまちもちまつり」
2020(R2)年度	西川副公民館	佐賀市	西川副を音楽でつなごう
2020(R2)年度	武内公民館(企画のみ)	武雄市	あなたが行きたい祭りをつくろう

P23へ
事例 07

P27へ
事例 09

防災は、まちづくりには不可欠。 だからこそ、みんなで考え行動できる課題。

防災は身近なテーマで課題になりやすいが…

安全・安心な地域づくりを考えると、身近な課題として防災があげられます。課題解決支援講座を始めた頃は、行政から自主防災組織づくりの要請があった時代（兵庫、鍋島、神野）でした。水害常習地区（橘）や土砂災害地区（南多久、東脊振）は、災害に対して危機感を強く持っていました。また、災害に備えて自主防災組織でまちを再点検したり（成和）、自主防災組織自体の再編成とスキルアップをはかりたい地区（古枝）もありました。近年、佐賀県でも水害の被災が続き、危機感をもち課題と捉えている地域も多いので、住民が参加しやすいプログラムづくりを考えましょう。

まち点検とシミュレーションで防災を考える

防災の主な手法はまちあるきや点検で、地図を見ながら避難通路の確認や危険箇所等を地図に落とし込み、自分たちの防災マップを作成します。そこに避難体験をシミュレーションする機会として、HUG（避難所運営ゲーム）（鍋島）やDIG（災害図上訓練）（神野）、クロスロード（YES、NOの判断ゲーム）（東脊振）、サバイバル体験（古枝）を組み合わせたりします。近年は、豪雨被害等から地域での避難のタイミングを探る、マイタイムラインを作成（古枝）し、災害は誰でも命にかかわる危険性があることを認識し、地域で何ができるかを話し合う取り組みへと変化してきています。

連携で幅広いプログラムづくり

国土交通省の河川事務所や各市町の防災担当課、防災グッズを専門に扱っている企業等と連携することで、講座のプログラムの幅が広がります。より実践的に行ったり、必要な防災グッズの知識や使い方の体験等ができます。また、防災に子どもの視点を入れた取り組み（成和）では、大人の視点では気づかない通学路での危険な場所等がピックアップされました。その後、地域のおまつりで子どもの発表会も行われたことによって、住民にも共有できるようになりました。

全住民が参加しやすい方法を考える

防災を課題にした取り組みは、自治会や住民を巻き込み（参加を促し）やすく、地域全体で動きやすいですが、動員を掛けるとどうしてもやらされ感が出てきてしまいます。プログラムに危機感だけを取り入れるのではなく、ちょっと面白くて役に立つものを絡めたり、働いている子育て世代も親子参加できるような楽しいプログラムの工夫とその後も継続できる展開を考えましょう。また日頃から公民館やセンターは、お互いの顔がわかるような住民間のコミュニケーションづくりに努めることも大事です。



- ① 身近な課題だからこそ、いかに住民の参加を促すかが大事。
- ② 地域の再確認や防災の体験学習を講座の中で学ぶ。
- ③ 防災機関や団体と連携することで、プログラムの幅が広がる。
- ④ 組織を作るだけでなく、継続できる仕組みを考える。

防災を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2012(H24)年度	兵庫公民館	佐賀市	兵庫町「地域防災」講座
2013(H25)年度	鍋島公民館	佐賀市	やられる前の防災学
2014(H26)年度	神野公民館	佐賀市	防災アクションことはじめ
2014(H26)年度	橘公民館	武雄市	たちばな防災講座
2015(H27)年度	南多久公民館	多久市	南多久地域防災力アップ講座
2016(H28)年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO!で成和でGO!成和の防災!あそぼ~さい!
2016(H28)年度	東脊振公民館	吉野ヶ里町	「防災」話していますか?もしもの時のこと
2018(H30)年度	古枝公民館	鹿島市	ふるえだ防災プロジェクト

P15へ
事例 03

子ども・学校連携

子どもの存在を意識することで、 地域の未来の芽がふくらむ。

子どもも地域社会の一員

公民館やセンターの中には、小学校と隣り合わせのところがあります。上手く連携して事業をしているところもありますがまだまだ少数で、学校と何か一緒にすることはハードルが高いようです。課題解決支援講座では、小学校の総合学習の時間を活用して一緒にできることを考えてみました。公民館はどんなところかを知ってもらうことと、地域学習を結びつけ（能古見）、地域の魅力や課題、未来を考え、地域の人の考えを子どもの視点で調査（大良）をしました。子どもも地域社会の一員であることを住民にも認識してもらう機会となります。

地域課題に子どもの視点や存在を活かす

地域課題には、子どもの視点や存在を大切にしたプログラムづくりが必要です。子どもにとっても、自分が住んでいる地域のことを考える機会となります。家族以外の人と知り合ったり、地域の未来像をイメージすることで、自然と郷土愛も育まれていきます。地域にとっても、講座開催によって住民ニーズや地域の活性化への刺激になったという新鮮な驚きがあります。親子参加のイベント（有田、鳥栖）、子育ての課題解決のきっかけ（桜岡、大成）、ワークショップで考えや気づきを人前で発表する（東唐津、成和、大良）など、やり方の工夫次第では地域課題が地域の強みに変わります。

相乗効果を生み出すプログラムを工夫

大人は子どもの存在を意識することで未来を展望しやすくなります。さらに、大人が子どものために「なんとかしなければ」というモチベーションも湧きやすいです。そして、子どもの視点を通して地域の未来を考えるという相乗効果も生みだされます。しかし、働いている子育て世代に講座へ参加してもらうには大変苦労がいります。だからこそプログラムを工夫する必要があります。それは環境を整えるということも含めて、親と子が一緒に楽しめるものや親と子が別メニューになっているものなど、多様に考えられます。

地域の未来が芽吹く

相乗効果で生まれた大人のモチベーションは、子どもと大人の未来を作る地域づくりに結びついていきます。大人同士の関係では生まれない効果が大人と子どもとの関係で生まれ、より未来へのイメージが湧きやすくなります。子どもの未来を考えるということは、地域の未来を考えることなのです。大人が地域の未来に対しモチベーションを生み出していくのは、子どもを育てるようなものです。それを地域への芽吹きを促す行動につなげていきましょう。そして芽が出たら、みんなで水を撒くことも大事です。地域の課題に子育て世代が参加するということは、子どものことを地域全体で共有化する機会にもつながります。



- ① 学校や子ども団体等との協働も視野に入れる。
- ② 地域課題には子どもの視点や存在も大切。
- ③ 子育て世代の参加を促す工夫が必要。
- ④ 地域の芽をみんなで育てていく。

子ども・学校連携を実行したところ

年度	公民館等名	市町名	テーマ
2016(H28)年度	成和公民館	唐津市	唐ワンGO!で成和でGO!成和の防災!あそぼ~さい!
2017(H29)年度	東唐津公民館	唐津市	東唐津あかりプロジェクト
2017(H29)年度	桜岡支館	小城市	地域で子育て 伝えないと伝わらない
2018(H30)年度	大成公民館	唐津市	ようこそ 大志のお父さん!あなたの知らない世界へ
2018(H30)年度	有田町公民館	有田町	遊びの楽校(がっこう) inありた
2019(R元)年度	鳥栖まちづくり推進センター	鳥栖市	みんなでつくる「とすまちもちまつり」
2019(R元)年度	能古見公民館	鹿島市	のごみ★お宝再発見プロジェクト
2020(R2)年度	大良公民館	唐津市	大良しあわせプロジェクト

P21へ
事例 06

P23へ
事例 07

P27へ
事例 09

P25へ
事例 08

P29へ
事例 10



「つぶやき」から始まる交流促進

ワンポイント・アドバイスはおわかりになりましたか。もう少し伝えたいことがあります。

いくつかの課題解決支援講座に取り組んでみてわかったことは、最初の準備での話し合いに苦労することです。どんな会議でも、すぐに活発な意見が出たり、いいアイデアが出るものではありません。公民館では、学校のような職員会議がない場合もありますので、よけいに意見を言い出しにくいものです。

そんな状況を打開するのは、公民館職員の「つぶやき」です。なにげない一言です。では「つぶやき」はどこから生まれてくるのでしょうか。先に、公民館の困りごと＝地域課題ではない、と述べました。でも職員が地域課題だと思われるのはなぜでしょうか。それは公民館利用者との接点があるからです。急に思いつくわけではなく、日頃の利用者の皆さんとの会話から、「つぶやき」が生まれてきます。「つぶやき」の中に課題の手がかりが隠されていたりします。公民館にとって、立ち話やお茶飲み話は、課題発見の糸口になります。ふだんからの公民館職員と利用者とのコミュニケーションをはかることが大切です。

利用者との間であれば、職員が意識的に声掛けをしていく、といった行動をとればすむのですが、住民相互では難しい場合もでてきます。だから課題解決支援講座では、コミュニケーションを目的に入れて企画していきます。しかし、交流やコミュニケーションだけを目的にしたら、どれ

だけの人が集まってくるでしょうか。ここが難しいところです。

参加者は、テーマの魅力で集まってきます。コミュニケーションを目的に集まってきているわけではないのです。コミュニケーションの促進は副次的な産物なのです。だからこそ工夫が必要なのです。アイスブレイクはもちろん、カフェコーナーの設置、一品持ち寄り、食事を介しての交流等々、いろんな企画をプログラムの中に組み入れると交流が促進されていきます。

「地域課題解決支援講座」…とただで硬い感じがしてしまいます。だからテーマやタイトルにも気配りをしてみましょう。わかりやすく親しみやすく、なるほどと思えるようなキャッチコピーを考えてみましょう。

講座が面白ければ、コミュニケーションもしだいはかられていきます。面白くなければ、コミュニケーションもしぼんでいきます。そんな関係です。コミュニケーションがはかられていけば、参加者みなさんも「つぶやき」を出してくれます。参加者の「つぶやき」は、一人ひとりが課題解決に興味を示した瞬間なのです。



地域を知るための工夫

課題解決支援講座では、地域を知ることがまずは大事になります。地域を知らずして、地域課題はありえません。準備の過程で、ぜひ「まちあるき」を関係者でしてみましょう。まちの雰囲気を知ることができ、まちの変化を感じることができます。

参加者が地域を知るためには、いくつかの方法があります。一つは、「調査」、もう一つは「まちあるき」です。

「調査」では、高齢者の気持ちや学習ニーズが知りたい、新住民の意識を知りたい、住民の地域づくりへの関心を知りたい等々、いろんな調査を手掛けてきました。学術調査ではないので、参加者の皆さんとの協議で一緒に質問項目を作成します。つまり自分たちの知りたいことを質問項目にしていきます。それを調査し、集計・分析して、その結果について学び合い話合います。調査結果の分析は、専門家にアドバイスをお願いします。

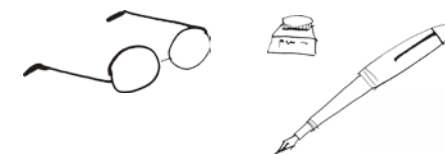
「まちあるき」も大変人気のある方法です。健康にいいから、みんなと一緒に歩くと楽しいから、新しい地域の発見があるから等々、理由は様々です。講座では、カメラやタブレットをもって歩き、思い出の場所を撮影し、最終回に写真を見ながら、発表会を企画します。思い出と一緒に語ってもらいます。これは、地域の「記憶の共有化」とでもいうような、一人の地域の思い出をみんなで分かち合うといった取り組みです。公民館に写真を

飾って地域全体で共有化する工夫をすると、「地域の記憶」になっていきます。

防災講座では、ハザードマップづくりに取り組んでみました。集落の白地図をテーブルに広げ、消防団員や自治会の役員たちが、「ここは水が出る」「ここは危ない」など、次々と「つぶやき」が発せられます。「なんとかしないと」という気持ちが溢れています。危ない箇所を実際に見て回って、避難計画やタイムラインを立てていきます。

子どもたちにも活躍してもらった企画もありました。たまたま国勢調査の年だったので、「大良子ども調査員」と名乗ってもらい、地域のいろんな世代の方にインタビューをしてもらいました。保護者の方にも協力していただき、一緒に回ってもらいました。子どもが訪ねて来てくれる、子どもの声が聞こえる、それだけでも地域の方にとってみると嬉しいものです。とても喜ばれました。

地域を知る企画は、モチベーションを高めてくれます。「知っていると思っていたことが、変わっていて驚いた、なんとかしなければ…」と思ったときが、地域再発見の瞬間です。





講座運営の手法のスキルアップ

講座を企画したあとは、実施の段階に入ります。講師を招いて講義をしてもらう。ワークショップを回してもらう。振り返りを行ったり、次回の準備をしたりと職員は大忙しになります。

忙しくなるのですが、講座を成功させていくためには、職員は労を惜しんではならないでしょう。なぜなら、課題解決支援講座の運営の要であり、課題解決にむけた住民の取り組みの底支えの役割を担うからなのです。

講座運営の要といったのは、二つの意味があります。一つは、なぜこの講座をやるのかを、参加者にわかりやすく伝えていかなければならないからです。講師にお任せするわけにはいきません。公民館としてもなぜ取り組むのか。毎回、参加者一人ひとりの心に届くように伝えていきましょう。

二つにはワークショップは、今ではどこの公民館でも取り組まれるようになりました。小グループに分かれてテーマについての話し合い学習をします。それを付箋紙や広用紙を使って、最後に意見発表し共有化していきます。誰もが参加でき、意見を言いやすくする手法だと思ってもらってもいいかと思います。しかしグループに分かれても、話し合いがすぐにうまくいくかというと、必ずしもそうではありません。誰かがファシリテートしなければなりません。そうすると、公民館職員が担うことになります。ファシリテートのスキルを身につけておくと、講座が進めやすくなります。

参加者は講座がない日にも公民館を利用します。そんなときに、講座の感想や期待を話してくれることがあります。職員から「どうでしたか」と声掛けをすると、一層いいでしょう。講座のときには話せなかったことを、つぶやくように話をしてくれます。それを聞き取っていくのは職員の務めです。次回の講座に活かしていく材料を話してくれているのです。

公民館職員は、体系的・専門的な研修がとて少ない職場です。一方で窓口の受付業務や電話対応、貸館対応、まちづくり協議会のお世話など、いろんな事務的処理が求められます。事務的な処理に追われていると、それが公民館の仕事だと勘違いしてしまいます。それでは、地域課題解決型学習ができないばかりか、地域づくりの糸口も見えてこないでしょう。

全国の公民館では、新しい手法が開発されています。こんなやり方があったのかと驚きます。自分をバージョンアップさせるために、専門的職員研修を重ねてスキルアップをはかる努力を続けていきましょう。



「チーム公民館」をめざして

課題解決支援講座では、いろんな関係機関や学校との連携をはかる努力をしてきました。まちづくり協議会などの地域団体や、自治体の関係部局や国の関係機関、学校や大学など、さまざまな機関・団体との連携をはかってきました。

今、地域を対象とする各分野でよく使われる言葉の一つに、「多機関・多職種連携」があります。これは、地域の中で「困り感」をもっている人がいたとすると、その解決のためには一つの行政部局だけではなく、いろんな領域と結びついて問題解決にあたっていかなければならないということを意味しています。例えば、「子どもの貧困」や「DV」への対応などが代表的なものです。

公民館でも、「多機関・多職種連携」がとても重要です。公民館は、とても小さな職場です。なんでもかんでもできるわけではありません。だからこそ、いろんな人の力を借りてやらなければ、地域課題解決型の学習講座の実施は難しいでしょう。

学校との連携も大切です。佐賀県は、一小学区に一公民館体制をとっているところが殆どです。校区内にある学校との連携は大切なのですが、学校と協力しながら事業を展開している公民館がどれだけあるのでしょうか。実は、課題解決支援講座の実施を通して、公民館と学校との日常的な交流が少ないことがわかりました。

学校は、いま「チーム学校」へと変貌をとげつつあります。学校にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、いろんな人が入ってきていて、チームとして教育にあたろうという方向をめざしています。残念ながら、公民館にはそれだけの人的配置はできません。しかし地域を見渡してみると、いろんな人やいろんな機関・団体があります。

「チーム学校」ができるのであれば、「チーム公民館」もできそうですね。公民館を核として「多機関・多職種連携」をはかっていくことはできないでしょうか。いろんな機関や団体が、公民館を介してつながりあっていく。これが「チーム公民館」です。

その役割は、誰もが地域で幸せを求めることができ、住み続けていくことができるように支援していくことです。そこに住む人々の暮らしや健康と生涯学習のコーディネーションの役割を公民館が果たしていく。みんなが地域で暮らす夢を描くことかのでできるようになる。課題解決支援講座の取り組みは、その第一歩です。



課題解決支援講座に関わって

地域づくりアドバイザー | 多良 淳二 さん

はじめに

これまで「地域づくり等の支援講座」に多く携わってきましたが、1回のみの講座で終わるのが一般的でした。内容は事例の紹介や提案等で、深くかかわることができません。しかし、今回の課題解決支援講座は、主催地の自主的意欲があることや、市町行政と公民館とアバンセの3者協働による取り組みであること、3～4回の連続講座であることが特長的でした。体験型やワークショップも取り入れ、実践活動と振り返りまで丁寧に取り組むことができます。事前準備の打ち合わせから回を重ねていくプロセスは、スタッフや参加者共にスキルアップにもつながる画期的な企画だったと思います。

この講座に、講師として複数回関わり私自身も大変勉強になりました。

地域の課題とは

少子高齢化社会の加速化がもたらす人口構造の変化、地球温暖化現象による気候変動や様々な生活環境の変化、デジタル社会やコロナ禍による生活様式の変化、格差社会が偏在化する一方で、SDGsの取り組みが提唱される等目まぐるしく時代は変化しています。これらの課題は、私たちの身近な社会や地域の課題とも密接に繋がっています。共通課題もあれば、地域によっては様々であり、さらに課題同士が複雑に絡み合っています。だから、一つの課題を解決しようと思っても簡単に解決できません。地域課題を俯瞰的に捉える視点も必要です。

課題の解決策として

私たちは、地域社会に対して関心を持ち、危機感と問題意識を持つことが重要です。他人事ではなく自分事として捉え、「課題発見力」を養い、地域ぐるみで共有し、解決策への行動を起こすことが求められています。

そのきっかけの手助けになるのが、今回の講座の取り組みであったかと思われます。

印象に残っていること

講座を開催する時は、スタッフや参加者の皆さんも緊張し不安げな様子ですが、回を重ねることによって、気心が知れ本音で意見が言い合えたことに、参画意識の満足度も上がります。最後は実践体験で盛り上がり、経験できたことが自信に繋がり、達成感が得られます。次回は自分たちで、もっと工夫して、やってみようとする意欲が芽生えたことです。改めて、参加者の皆さんが「自分の可能性」や「人と人の結びつき」の大切さを考えるきっかけにもなりました。

今後の課題

地域の課題に関心を持つ住民の意識向上をどう図るか。それらを纏める地域リーダーとマネジメントできる人材の育成及び後継者づくり。個人や活動団体が機能する環境づくりとネットワークの構築、人財データの収集と活用、気軽に交流や活動のできる拠点作りも必要です。

最後に

前述の課題を解決するためには、地域のコミュニティーセンターとしての拠点である公民館の存在意義は大きく、重要な役割を担っています。困ったときの窓口相談所としてのプラットフォームになる頼れる存在です。市町行政の理解と協力体制も欠かせません。アバンセの役割として、佐賀県内の市町や公民館との連携を密にした、ネットワークの構築と県行政との連携によるバックアップ支援体制の構築も必要です。この三者が連携して取り組む課題解決支援講座は有意義であり、今後も必要かと思われます。

PROFILE.

1975年佐賀銀行入行。その後、佐賀銀行文化財回事務局長を務めながら、地域づくりの支援に奔走。吉野ヶ里町在住。



地域とともに作り上げる課題解決支援講座

NPO法人唐津市子育て支援情報センター センター長 | 山口 ひろみ さん

公民館の役割とは

唐津で「課題解決支援講座が始まる」と聞いたのが、2016年度(平成28年度)で、ワクワク・ドキドキ感からのスタートでした。

実施されていく中で、参加者や公民館、地域の声などを聞き、この講座を通して地域のつながりを作ることが分かり、また公民館職員の学びになっていることを知りました。地域の拠点としてだけではなく、公民館の役割の大切さを再認識し、住民間のきずなの仕組みを作っていくことも大切だと実感しました。

唐津市での課題解決支援講座の取り組み

成和公民館を皮切りに、唐津でも講座の実施や開催を希望する公民館が増えました。現場にいる公民館職員も日々どのように公民館の運営を行ったらよいか、住民のつながりや社会的きずなを作っていくにはどうしたらよいかなどを悩んでいました。私もそういう声を聞く機会があり、この講座で知りたい、学びたいという思いも多かったのではないのでしょうか。

私も最初は見守っているだけでしたが、徐々に講座に関わっていく中で、この講座が公民館職員だけではなく、アバンセや市町職員の大きな学びにもなっていることを知りました。とても印象的だったのが、常にアバンセ職員が公民館職員と一緒に悩み、考え、行動していたことです。講座の打ち合わせ、計画、実施まで寄り添い、講座を具現化していました。その様子を見て、何かお手伝いできるのではないかと思い、関わらせて頂きました。

最初は分からないままのスタートでしたが、地域を知る、理解することから始めることで、この地域に何が必要なのか少しずつ見え、たくさんのアイデアが出てきました。みんなでたくさん悩み、考えている時の表情が生き生きとしていたことを今でもはっきりと覚えています。

さらに、講座が進むにつれ、住民の意識が変わったことを感じるようになりました。最初は、参加のみだった住民も、応援者、協力者、そして共に活動へとつながっていきました。

地域課題解決とは、住民がいかに地域を支え、盛り上げるかが重要であり、公民館がそのための連携の拠点、参画・協働の場としての役割があると思います。学びからつながり広がることで、住民が主体性となり、地域社会づくりの役割に貢献するきっかけとなるのではないのでしょうか。

この講座では、地域の人みんなで悩む姿、対話する姿、楽しそうな姿などを見ることができました。住民が互いに学び合い、つながり、交流することから、安心して暮らせる地域へつながっていくと思います。さらに嬉しいことに講座後も住民主体で、地域活動を実施できるようになってきたことです。

これからの公民館の在り方

10年間、多くの公民館等で講座が展開されるようになりました。たくさんの学びがあり、たくさんの出会い、つながりがあったかと思っています。講座の中で見つかった課題を次回に活かして計画・実施につなげました。私も関わり、見守れたことがとても嬉しく思います。私自身が多くの学びとなりました。

これからますます公民館の重要性を感じています。この地域課題解決支援講座が、佐賀県社会教育のプラットフォーム整備につながると強く感じています。これからもひとりひとりが笑顔いっぱいになれる地域を目指していきたいです。

PROFILE.

看護や児童福祉等を学び、2004年から現職。家庭教育支援の立場から地域の課題解決にアプローチ。唐津市在住。



公民館職員の立場からみる課題解決支援講座

佐賀市立北川副公民館 | 鶴 ちふみ さん

地域に寄り添う公民館職員を目指して

課題解決支援講座は、公民館の現場にいる職員の視野を広げてくれたと感じています。

公民館は社会教育法第20条に明記されるように、単なる貸館的な施設ではなく、地域住民の日常生活に密着し、住民自治や住民主体の活動を支援し、「つどい・まなび・つなぐ」役割があるとされてきました。

生涯学習の推進や少子高齢化社会の到来という時代の流れを経て、近年では地域コミュニティなど、住民自治の主体性を育むことへの重要性はさらに高まっています。地域づくりに関する学びの場を充実させるために公民館職員がより身近な存在として地域に寄り添うことは時代の必然ではないでしょうか。

課題解決支援講座をやってみて

平成24年度に、当時勤務をしていた公民館がアバンセの課題解決支援講座に参加申込を行い、本講座に携わりました。

当時は地域課題についての理解は薄く、ただ地域活動を積極的にやってくれるボランティアの育成がしたいという公民館側の事情がありました。講座は公民館職員の勘と経験で企画した趣味教養的な内容が多く、地域課題はボランティアの育成だと思い込んでいたのです。とりあえずのスタートでしたが、講座を複数回の連続にして、アバンセ職員や講師からのアドバイスも含めて内容を熟議していくと、PDCAサイクルが生まれ、だんだんと参加者の考えが可視化できたことは大きな手応えになりました。講座を実践するプロセスで地域住民の本音や思い、交流の大切さを感じたことが次へのステップへ向かう動機になった気がします。また、講座ごとに振り返りを含めたニュースレターを発信できたこともよかったと思います。

公民館職員の務めとは

あれから10年になりますが、その後、県内の様々な地域で課題解決支援講座が展開されてきました。異動でいくつかの公民館を経験しましたが、地域の課題といってもそれを発見することは容易ではなく、市町の様々な部署や地域団体、NPOなどたくさんの関係機関とネットワークを形成し、情報の共有を図ることが大切だと思います。また、公民館職員は「よき事例に学べ」と言われますが、他館の課題解決支援講座を知ることで、まち歩きやグループワークの手法や地域での合意形成への導き方など参考になることが多く、職員のスキルアップに効果がありました。

地域の課題を発見するのも解決するのも公民館ではなく、そこで暮らす人たちであってほしいです。そのためには地域活動を行う団体や住民に対し、一堂に会して対話する場、交流する場を提案し、地域についての情報共有や課題の掘り起こしができれば、地域コミュニティへの気運を高めることができるのではないのでしょうか。

令和に入り、新型コロナウイルス感染症の拡大は、公民館に「集えない」という新たな試練を与えましたが、デジタル化やIT環境の整備などの取り組みも進んでいます。Withコロナ時代へ公民館を取り巻く環境が変化しても公民館職員は、視野を広く、地域的情報を収集し、提供し、つながりが持続するように、地域住民のよき理解者、伴走者であることに何の変わりもないと思っています。

PROFILE.

2007年から佐賀市の公民館職員として勤務。循誘、本庄、勤興公民館を経て、2020年より現職。佐賀市在住。



課題解決支援講座の委託者として

佐賀県県民環境部まなび課 生涯学習・体験担当係長 | 須貝 遊 さん

課題解決支援講座の目的

本県は、佐賀県立生涯学習センター（以下「アバンセ」）を「佐賀県の生涯学習・社会教育の中核施設」と位置づけ、事業を委託しています。特に人材育成に力を注いでおり、その中でも課題解決支援講座（以下「本講座」）は最も重視している事業のひとつです。公民館等職員、市町職員、アバンセ職員の3者が協働し、地域住民が安全・安心・快適なコミュニティ生活を送るため、地域の課題へ対処できる能力と意欲を身につけることを目的としています。

本講座は、講義や住民の意見出しのワークショップ等によって、住民自らが地域の課題を考え、解決していくための知識や手法を学習する機会を提供するものです。

また、課題のテーマに即した講座のプロセスを通して、公民館等職員、市町職員が、自分の地域や住民のことをさらに知ること、地域独自の講座に関する企画力、運営力のスキルアップを図ることも、本講座の大きな目的の一つです。

課題の熟考と自分事化

各地域で課題を決定するにあたって「これは誰の課題なのか」を常に意識し、公民館等職員、市町職員、必要な場合には関係団体の役員も加わり、何度も事前の打ち合わせをして一緒に課題を掘り下げた上で、講座を開催します。

行政課題として一過性のブームで終わることなく、参加者が話し合い、課題を共有し、専門家の意見を聞き、地域を歩き、自分たちの生活や地域に落とし込んでいく。その学びの過程で、住民同士が深く知り合い、親交を結び、協働して「同じ地域の住民」になっていくことこそ、社会教育の姿であり、「学びを通じた地域づくり、人づくり」を体現していると言えるでしょう。講座の時間が終わったにもかかわらず

「次は何をしようか」とにぎやかに話し込みなかなか帰らない参加者の姿が見られると、講座が成功に向かって進んでいると感じます。

講座の真価・深化・進化

講座自体は地域づくりや人づくりの始まりであり、きっかけに過ぎません。本講座に参加された方がそれぞれの立場で、学んだこと、考えたこと、触れたこと、培ったことを地域で活かすことで真価を発揮し、広がり、深化していきます。

「とにかく何かしたかった。モヤモヤをなんとかしたかったから応募した」

課題解決支援講座を実際に経験し、現在も様々な事業に取り組まれている社会教育施設の職員からこの言葉を聞き、感銘を受けました。社会教育に携わる方々の真摯な想いに応えられることの喜びはひとしおです。

10年前は参加市町を募るのも難しかった本講座ですが、学ばれ、経験された方々の実践や口コミのおかげで現在では多数の応募をいただいています。学んだ方々、参加した方々他を数えると1,000人以上の方々が関わっており、佐賀県の生涯学習・社会教育をそれぞれの地域で支えてくださっています。

近年、地縁団体の弱体化をはじめ、社会教育が隘路に立っていることが指摘されています。自然災害や新型コロナウイルス感染症の影響が続く今こそ、社会教育の学びの姿勢と学びの成果は重要なのではないのでしょうか。

今後、本講座が進化し、より複雑化していく地域課題に取り組むための支えとなるよう期待しています。

PROFILE.

県内中学校教諭を経て、2019年から現職。社会教育主事。佐賀県社会教育委員の会議提言書を取りまとめた。鳥栖市在住。





10年間の「みんなで楽しく困る」実践の歩みとして

ここでは課題解決支援講座10年間の歩み、およびこの冊子づくりにむけた成果のとりまとめを、「みんなで楽しく困る」実践にむけての歩みとして、考えてみたいと思います。

意義深い、社会教育の営みの「見える化」

県一市町一公民館が協働企画のプロセスを通して互いに学びあう本講座は、合併後市町独自の人材育成が一層厳しい中での、貴重な実践となりました。さらに今回の冊子づくりは、社会教育的営みの見える化・共有化にむけた、次の段階の新たな挑戦といえます。

まず本冊子では講座の出発点・成果のみならず、3者協働の講座づくりのプロセス全体が明快に示されています。市民には講座が学びの場ですが、職員や関係者にとってはそれ以上に企画会議や諸準備が学びの場です。10の事例は、職員・関係者たちの学びあいの可視化に他なりません。

また本冊子はその学びあいを読者がたどることができるよう、工夫を試みています。典型が、講座づくりのプロセスに、職員・関係者間や市民との間に生じた、“うまくいかなさ”“モヤモヤ感”、またその解決への工夫が、コメント的に添えられていることです。他の実践を我がこととして受け止め考え始めるためには、うまくいかなさの共有が大事なのではないかと。ここには本冊子編集委員会での議論も活かされています。

さらに、各々の事例におけるポイント提示はもとより、各事例に焦点をあてるだけでは見えてこない、地域の学習プログラム形成に共通して大事な「ワンポイント・アドバイス」の抽出を試みたことは注目に値します。ただしこれは「正解」ではありません。項目もその解釈も、これから読者のみなさんとともに、考えあっていくための大事な素材です。「ワンポイント・アドバイス」は、関係者からこの本を手にとられた方々へ、まず投げられたボールとうけとめていただければと思います。

見える化≒経営的視点が持つ危うさも考える

こうした目に見えにくい公民館・社会教育の“技”の可視化は、実践の共有にも、「評価の時代」に社会教育が社会的に認知されていくためにも、意義深いことです。ただし、プロセスやポイントをわかりやすく表現するほどに、マニュアル的にスキルを身につけさえすれば、豊かな講座や学習支援がなりたつとの誤読をよぶかもしれません。また経営的視点に付随する、ある姿勢を読み手が内面化する恐れもあります。

こうした危うさを超えていくために、ここでは本冊子でも用いられている「巻き込む」という言葉に焦点をあてて、問い直しを試みてみます。

「巻き込む」という言葉は、ビジネスやまちづくりの分野でここ10年ほどよく使われるようになりました。総務省人材力活性化研究会『地域づくり人ハンドブック』（2011）は、必要なときに必要な人材とコラボレーションできる「巻き込み力」として、人材把握・コミュニケーション・調整力、を提示しています。ビジネスでも、社内外の他者と協力してプロジェクトを成功させる上では、周囲を巻き込む力が必要とされます。

一人で抱え込まず、共感・関与する主体層の広がりをつくること。情勢やニーズを分析し調整や交渉を重ねながら、考えや組織文化の違いをこえて、関連組織や多様な住民層と連携すること。こうしたプロ



セスを創造し、明示化していくことは「課題解決」への大事なポイントでしょう。近年社会教育分野でも日常的に聞くようになったファシリテーションも、多様な人が場をともにし、他者を巻き込んでいくための有効な技術とみられています。

しかし「巻き込む」という言葉は、その正当性を決めるのは巻き込む側の職員や企画者であり、学習者は職員の「対象」であるかのような、操作的な色合いをはらむようにも思います。一方で社会教育は相互教育であり、職員が学習主体の立場にたちきるところから職員と住民がともに教育を構想する特徴をもっています。誰かが方向を決めてそこに対象を巻き込むのではなく、ともに歩むわけです。

「巻き込む」から「みんなで困る」へ

そこで「ともに歩む」を深めるべく、課題を「困り事」といいかえて、本冊子の事例にたちかえてみます。中川副公民館では、職員自身も地域の

困り事がわからないという立ち位置、困り事の見つめ直しから出発しています。桜岡支館では、地域や子育てへの気づきを語り合う機会が最終段階に入ってからのことでした。自らを率直に表現し、他者の困り事を受け止め語り合うまでには、自分に集中できる時間や表現の機会など、幾重もの段階の保障がなされてきました。「困った、を伝える」ことは簡単ではないわけです。また「地域への本音が言える場を

九州大学大学院 人間環境研究院 教育学部門
社会教育学 教授

岡 幸江 さん

PROFILE.

専門は社会教育学、地域教育論。埼玉大学を經由して、2009年九州大学へ。九州大学大学院准教授を経て、2021年1月より現職。社会教育にかかわるリーダー養成や各地域の実践への支援等を行っている。福岡市在住。



「課題解決」ソモソモ考

55

今や「課題解決」は営利・非営利を問わず、どの領域・業種でも重要視されるようになり、トレンドといっても過言ではありません。とりわけ企業においては、SDGsへの関心の高まりもあいまって、ビジョンや事業手法などの随所で用いられています。筆者は長らく、ボランティア・NPOや地域活動を応援しつつ、多様な主体をつなぐコーディネートをする中間支援のNPOとして活動しているが、こうした時流自体は喜ばしいことと受け止めています。

他方、各所の取り組みを見聞きするにつけ、肝心の「課題」をどう捉え、どのように取り組んだことでどう「解決」したのか、その道すじが見えづらい。筆者も自らのNPOにおいて諸々の事業を実践しながら、「どのように取り組むか」に腐心するあまり、「ビフォー／アフター」をつぶさに検証できていないこともしばしばあります。このコラムでは、アバンセが数年来にわたり佐賀県内の市町と連携して実施した課題解決支援講座の実施状況も踏まえながら、「課題解決」が真に実りある実践となるために重視すべきと思われる点を、以下3つ挙げたいと思います。

「課題」の捉え方自体に関心を払おう

そもそも「問題」と「課題」は異なり、「課題」は「問題」を把握した上で抽出する必要があります。イラストの



「くらし×〇〇 つなぎの手帖」
(2019年4月 日本NPOセンター・ふくおかNPOセンター刊)



通り、「問題」はいわば見たり聞いたりして得られた事実であり、これ自体を「課題」として捉えてしまうと、本来取り組むべきことを見失いかねくなります。また、思い込みやそこから派生した主観的な仮説ありきともなりかねないため、事実面の情報が不足していると感じる場合は、アンケートやインタビュー等も行つて事実をつぶさにキャッチするよう努める必要があります。「課題」は、得られた事実を体系立てて整理したり異なる事実を結び付けたりする中であぶり出すことができます。

プロセスを大切にすることはもちろん、常に小さな影響・変化にも注視しよう

取り組みを行っているうちに、参加者やステークホルダー（濃淡こそあれ当該案件にかかわる関係者）の意識面・行動面での変化やすでにある制度・事業・しくみなどに多少なり影響がみられることがあるため、常々関心を払っておく必要があります。とりわけ参加者の変化については、何かのイベントを開催している最中にも把握できます。例えば、控えめで不安げだった人が時間の経過とともに主体的に動くようになるような場面が出てきたとします。その際は、単に個々人のリアクションとして受け止めたり主催者として喜んだりするだけでなく、取り組みが及ぼした「影響」「変化」として捉えておいた方が成果



特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表

古賀 桃子 さん

PROFILE.

学生時分まちづくりのNPOを経て、2002年に現組織を設立。[草の根から、社会を描く。]を合言葉に、企業・行政・公民館・社会福祉協議会等の橋渡しや伴走支援を通じた、地域づくり・社会づくりの黒子に注力。福岡市在住。

として事後に検証しやすくなります。これに加え、企画運営するコアメンバー間で、「〇〇さんは最近△△△な感じに変わってきた」などと、状況を逐次共有しておくことが望ましいです。そうすることで、仮に主催者としては望ましくないようなネガティブな影響・変化が見られた際にも、軌道修正をスピーディかつ柔軟にしやすいでしょう。

成果のみならず、最適な型式での持続可能性もさぐろう

ここ数年来、各所で「費用対効果」や「コスパ（コストパフォーマンス）」という言葉が多く聞かれるようになりました。これについて筆者は、それぞれの人や団体が持ち合わせている資源（人財、資金、時間等）が限られている分、よりよい成果を得たい（出すべき）という志向の表れとみています。課題解決をもくろむさまざまな事業の場面でも、成果を測る試みとして、取り組みを一定の数値として定量化しその数値を源泉とする「社会的インパクト評価」なる手法が導入されるようになってきました。成果の数値化についてはいささか否定論の方が多いような印象だが、いずれにせよこの流れも「よりよい成果を」との期待なり公正性・透明性（説明責任）への関心の表れとみています。加えて、「持続可能性」なる言葉もよく用いられるようになりました。この言葉は一見、「課題は短期で終結しがたいだけに、単発ではなく継続するべき」という期待と注文が入り混じっているような印象です。確かに、課題解決のための取り組みを進める中で、むしろ芽づる式に新たな課題が見えてくることもあるため、「継続性」は大変重たい懸案です。しかしながら「持続可能性」には、「継続性」という意味合いにとどまらず、これを確かなものとするために取り組みの最中に留意しておきたい実務面

での論点が含まれているような語感があります。例えば以下の3点です。

- 取り組みを伝え（※伝える際には楽しい演出も加味しながら）、課題自体をより多くの人たちに知ってもらうよう努める。
- さまざまな人や組織を巻き込み、課題を「わがごと」として捉える仲間を得ておく。
- 人や組織を巻き込む過程で、必要な資源（人財、資金等）の見立て・調整・確保にも努める。

ますます経済的に余裕のない人・組織が増えていくであろう中、限られた資源でよりよい成果を導き出すには、これらが重たい懸案事項となってくるに違いありません。体制・工程といった手法は、取り組みの内容や背景にある地域事情によりけりであろうから、それぞれで最適な型式を探ってみてください。

社会・経済の両面に大きな影響を与え続けているコロナ禍を経る中、くらしにまつわる困難な課題が増えるのみならず、例えば「貧困」にまつわる動向のように、中には複数の要因が組み合わさった新たな課題が出てくることも推測されます。幸い近年は立場・領域などを問わず、さまざまな人や組織とともに取り組みを持続可能なものとして自走させようとする実践者ないし関心者が増えています。ビジネスの世界では「脱自前主義」なる言葉も盛んに使われており、多様な人たちとともに課題を掘り下げ、社会貢献と両輪で事業展開することの知見も蓄積されつつあります。そんなこんなの様相を傍目に、コーディネートする側には、「問題」「課題」への感性和「取り組み」の手腕が大いに問われている気がしてなりません。まさに、人々に豊かな学びや体験を進めるみなさんの番です。

56

これまでに開催した31地域

2012（H24）年度～2016（H28）年度

共催担当課、共催公民館等、メイン講師の職名は開催当時のものです

年度	共催市町 担当課	共催公民館等	講座テーマ	メイン講師	参加者（年代）	講座回数・ 延べ人数	分野	手法		連携・協力	その他
2012年度 （H24）	佐賀市 社会教育課	勸興公民館	高齢者の 暮らしを考える	大学准教授	かささぎ学級 （高齢者学級）受講者	3回・ 110名	高齢者の課題	高齢者対象の聞き取り調査 ワークショップ		かささぎ学級（高齢者学級） 調査 → 民生委員等 佐賀市社会福祉協議会	講座終了後、会議を開催
		循誘公民館	地域でみつける あなたの幸せ	大学教授	YOU誘大学 （高齢者学級）受講者	3回・ 115名	地域参画	ワークショップ		YOU誘大学（高齢者学級）	講座のふりかえりをする『講座通信』を発行（3回） 講座終了後『お茶ご会』開催
		兵庫公民館	兵庫町 「地域防災」講座	防災 アドバイザー	自治会役員、自治公民館館長、 民生委員、地域連携協議会（各種団体の長）、 消防団団員、長生会、PTA、 グループホーム職員、一般住民（20～70代）	3回・ 110名	防災 つながりづくり	まちあるき（地域点検） 防災マップ作り		佐賀地方気象台 国土交通省筑後川河川事務所	講座終了後も防災講座を開催 各自治区に自主防災組織を立ち上げる
		久保泉公民館	地域力UP応援講座	地域づくり アドバイザー	自治会、えひめあやめ保全会会員、 一般住民 （50～80代）	3回・ 87名	えひめあやめの 保全活動 人材育成	事例発表 ワークショップ		えひめあやめ保存会	
	伊万里市 生涯学習課	—	学び・生かし方講座	大学准教授	伊万里塾（高齢者学級）の受講生および 受講経験者、「伊万里学」に興味関心のある人 （60代以上）	3回・ 37名	学びの循環 人材育成	事例発表 ワークショップ		伊万里塾	
2013年度 （H25）	佐賀市 社会教育課	開成公民館	地元を知ろう！ I♥（アイラブ）開成	地域づくり アドバイザー	高齢者サロン代表者、メンバー （60代以上）	4回・ 75名	地域の再発見 交流	まちあるき（地域再発見） まちのいいところ 危険なところのマップ作り		佐賀市開成3丁目ふれあいサロン絆	第3自治会と開催 高齢者サロンの在り方を模索 → 参加者の意見を聞き取りプログラム化 『講座通信』を発行（3回）
		鍋島公民館	やられる前の防災学	県防災士会 事務局長	自治会長、消防団、一般住民 （30～80代）	3回・ 61名	防災 交流	避難所運営模擬体験（HUG） 現地研修—事例発表 まちあるき（武雄市朝日町）		佐賀県防災士協会、武雄市朝日公民館、 武雄市朝日町高橋区自主防災会	『講座通信』を発行（3回）
		春日 コミュニティセンター	かたり愛、春日	市民活動 サポーター	自治会、PTA、子ども会、一般住民 （30～80代）	3回・ 81名	交流 地域参画	ワークショップ		さが市民活動サポートセンター	壁新聞をロビーに掲示 2014（H26）年度より、ワークショップがきっかけで歴史部会が立ち上がり、 講座の企画に役立てた
2014年度 （H26）	佐賀市 協働推進課	神野公民館	防災アクション ことはじめ	防災 アドバイザー	まちづくり協議会（防犯・防災部会）会員、 自治会長、民生委員、消防団、一般住民 （20～80代）	3回・ 204名	防災 人材育成	災害図上訓練体験（DIG） ワークショップ	まちあるき踏査 防災避難マップ作り	神野まちづくり協議会（以下まち協） （防犯・防災意識の高いまちづくり部会）	講座終了後、まち協の部会が中心となり、防災講座を開催
		春日北 コミュニティセンター	今こそ、その時！ みんなで考えよう安心して 暮らせるまち春日北	大学教授	自治会長、民生委員、PTA、福祉施設職員、 一般住民（30～80代） ※まちあるきには幼児や小学生も参加	3回・ 97名	地域のつながり 地域参画	ワークショップ まちあるき（地域点検）		みかん農園の方	『講座通信』を発行（1回）
	武雄市 文化・学習課	橘公民館	たちばな防災講座	河川事務所 建設専門官	自治会役員、民生委員、消防団、一般住民 （30～80代）	4回・ 290名	防災 コミュニティの 再構築	事例発表 まちあるき（地域点検） 非常食体験	防災マップ作り ワークショップ	国土交通省武雄河川事務所 武雄市安全安心課	2014（H26）～2016（H28）年度まで3年間の防災計画を立て公民館講座を実施 2015（H27）年度 文部科学省優良公民館表彰
2015年度 （H27）	佐賀市 協働推進課	富士 生涯学習センター	ふじくらしのススメ	地域づくり アドバイザー	一般住民 （30代～80代） ※まちあるきには幼児も参加	4回・ 45名	地域再発見 ネットワーク づくり	事例紹介 まちあるき（地域再発見） ワークショップ		食生活改善推進協議会富士支部	地域おこし協力隊の参加 講座終了後、人材リストの作成 → パソコン講座を企画・実施 壁新聞をフォレストふじに掲示
	多久市 生涯学習課	南多久公民館	南多久地域 防災力アップ講座	河川事務所 建設専門官	区長、民生委員、PTA、消防団、一般住民 （20代～70代）	4回・ 200名	防災 地域参画	まち歩き 防災マップ作り		国土交通省武雄河川事務所 多久市防災安全課	2016（H28）年度 町民運動会の競技種目に防災を取り入れて開催
	基山町 まちづくり課	第3区自治会	まちを歩いて 笑顔（しあわせ）探し	地域づくり コーディネーター	第3区自治会メンバー （30代～80代）	3回 ＋ 1回（プラスワン ミーティング） 70名（81名）	地域の再発見 仲間づくり 地域参画	事例紹介 ワークショップ まちあるき（地域再発見） 地域の良いところの写真のポストカード作り		まちなか公民館 ※交流の拠点として、基山町モール商店街 の空き店舗にオープン 誰もが気軽に使える居場所として開放	地域おこし協力隊参加 講座終了後に、プラスワンミーティング（自主参加形式）をまちなか公民館で開催 2016（H28）年度～第3区自治会で町のまちづくり基金を使って防災講座を開催 2017（H29）年度のコンファレンスで、つながの場づくりを実施
2016年度 （H28）	佐賀市 協働推進課	中川副公民館	元気で長生き大作戦！ in中川副	大学教授	まち協（歴史・伝統部会）、高齢者 （60代以上）	4回・ 142名	健康づくり ネットワーク づくり 歴史探訪	健康体操、健康チェック まちあるき（歴史探訪） ワークショップ ウォーキングマップ作り		NPO法人スポーツフォアオール 中川副まち協（歴史・伝統部会） 中川副食生活改善推進協議会	講座終了後、自主ウォーキング会ができる 2016（H28）年度～継続 中川副歴史探訪ウォーキング（月1回） 2020（R2）年度3月 まち協冊子発行 『元気で長生き大作戦！in中川副 中川副歴史探訪ウォーキング』
	唐津市 生涯学習文化財課	成和公民館	唐ワンGO！で 成和でGO！ 成和の防災！ あそぼ～さい！	大学講師	町内会、校区社会福祉協議会メンバー、 一般住民 （小学生～80代）	4回・ 306名	防災 地域参画 交流	ワークショップ まちあるき（地域点検） 防災マップ作り		成和子ども教室 地域のお母さん NPO唐津市子育て支援情報センター （唐ワンくん）	成和まつりで成和の防災について講座に参加の小学生が発表 講座の様子のパネルを作成（4枚）
	吉野ヶ里町 社会教育課	東脊振公民館	「防災」話していますか？ もしもの時のこと	ファシリテーター	松隈地区・坂本地区・永山地区に居住の方 （30～80代）	4回・ 94名	防災 地域参画	防災ゲーム（クロスロード） 事例発表 ワークショップ まちあるき（地域点検）	防災食体験 防災マップ作り 我が家の防災3ヶ条作成	佐賀県防災士会 吉野ヶ里町総務課	『講座通信』を発行（4回）

これまでに開催した 31 地域

2017（H29）年度～2021（R3）年度

共催担当課、共催公民館等、メイン講師の職名は開催当時のものです

年度	共催市町 担当課	共催公民館等	講座テーマ	メイン講師	参加者（年代）	講座回数・ 延べ人数	分野	手法	連携・協力	その他
2017年度 （H29）	唐津市 生涯学習文化財課	東唐津公民館	東唐津あかり プロジェクト	地域づくり アドバイザー	一般住民 （小学生～80代） イベント参加は幼児～70代	4回・ 135名	多世代交流 地域参画	ワークショップ（アイデア出し） キャンドルランプ作り イベント実践	東唐津地区のみなさん（空き瓶提供） NPO唐津市子育て支援 情報センター（唐ワンくん） 唐津南高校ボランティア 満島子ども教室の小学生 公民館の料理教室	『講座通信』を発行（4回） 講座終了後に祭りを復活させる （神社の境内にキャンドルランプを飾る） 講座終了後に公民館の一角に無料喫茶スペースを作る
	小城市 生涯学習課	小城公民館 桜岡支館	地域で子育て 伝えないと伝わらない	大学准教授	子ども 桜岡校区の小・中学生の保護者、 桜岡地区青少年健全育成会役員、一般住民 （幼児～70代）	3回・ 48名	子育て 交流 場づくり	ワークショップ （大人編・子ども編） 持ち寄り交流会	桜岡地区青少年健全育成会 子どもにかかわる大人たちの居場所づくり ま・まんदै	講座終了後、地域交流の場「Bar真理子」と「サンデーランチ屋」が誕生
	江北町 こども教育課	上分区自治会	上分区意識調査 発掘！あるある上分区	大学講師	上分区自治会役員、子ども会、 老人会、一般住民 （30～60代）	3回・ 102名	多世代交流 地域参画	ワークショップ（調査項目作成） 住民意識調査	江北町政策課	壁新聞を作成し、自治区の集会所に掲示 講座終了後、住民意識調査の結果を掲載した『行事カレンダー』を作成、全戸配布
2018年度 （H30）	唐津市 生涯学習文化財課	大成公民館	ようこそ 大志のお父さん！ あなたの知らない世界へ	元小学校校長	大志小学校校区内の 子育て世代の男性とその子ども （小学生～60代）	3回・ 29名	子育て世代の 男性の 地域参画	ワークショップ （親子の体験学習） 事例発表	大成地区駐在員、男の料理教室、民生委員 NPO唐津市子育て支援情報センター	『講座通信』を発行（3回） 講座終了後、交流会を開催　その後、男性のヨガ講座が誕生
	鹿島市 生涯学習課	古枝公民館	ふるえだ 防災プロジェクト	河川事務所 地域防災調整官	区長、民生委員、消防団、女性部、一般住民 （20～70代） ※サバイバル体験は幼児～70代	4回・ 146名	防災 地域参画	ワークショップ タイムライン作り サバイバル体験、非常食体験 現地見学 （鹿島新世紀センター）	国土交通省武雄河川事務所 佐賀県杵藤土木事務所 鹿島市総務課防災係 古枝地区自主防災組織 佐賀県立男女共同参画センター	『講座通信』を発行（3回） 講座終了後、2019（R元）年度 防災講座で各地区のタイムライン作成と 自主防災組織づくり
	有田町 生涯学習課	有田町公民館	遊びの楽校（がっこう） inありた	地域づくり アドバイザー	放課後子ども教室協働活動サポーター、 子育てや地域活動に関心のある一般住民 （50～80代） イベント参加は（幼児～80代）	4回・ （講座）60名 （イベント）183名	地域参画 人材発掘	ワークショップ（企画作り） イベント実践	放課後子ども教室協働活動サポーター、 町子ども担当課、町体育協会 佐賀県宇宙科学館	講座の様子のパネル展示 講座終了後、2019（R元）年度「子ども横丁」を継続、 2020（R2）年度、2021（R3）年度はコロナ禍で中止
2019年度 （R元）	鳥栖市 市民協働推進課	鳥栖まちづくり 推進センター	みんなでつくる 「とすまちもちまつり」	地域デザイナー	鳥栖地区まちづくり推進協議会、一般住民 （30代～70代） イベント参加は（幼児～80代）	4回・ （講座）204名 （イベント）400名	多世代交流 地域参画	ミニパネルディスカッション ワークショップ（企画作り） イベント実践	まち協、食生活改善推進協議会、消防団、 おやじの会、旧国鉄職員、留学生等 （鳥栖市マスコットとっとちゃん）	講座の様子のスライドショー、パネル展示 講座終了後、2020（R2）年度、 2021（R3）年度も「とすまちまちづくり」を計画するが、コロナ禍で中止
	伊万里市 生涯学習課	東山代公民館	めざせ！ ポットラックタウン ☆東山代	大学講師	一般住民 （小学生～70代）	3回・ 57名	多世代交流 地域参画	ワークショップ（すごろく） ポットラック（持ち寄り）	地域支援市職員	『講座通信』を発行（1回）
	鹿島市 生涯学習課	能古見公民館	のごみ★お宝再発見 プロジェクト	市民図書館 職員	一般住民、小学3年生 （小学生～80代）	（大人）2回 + （小学生）1回 121名	郷土歴史再発見 交流 地域参画 学校連携	体験学習（公民館探検・iPad、ドローン、史跡巡り）	地区振興会役員 ドローン操縦者 能古見小学校	『講座通信』を発行（3回） 新型コロナウイルス感染拡大防止のため第4回目が中止 講座終了後、教育委員会主催で小学校と「のごみ★お宝再発見プロジェクト」 講座開催、公民館は「のごみ歴史ウォーキング」を開催
2020年度 （R2）	佐賀市 公民館支援課	西川副公民館	西川副を 音楽でつなごう	地域づくり アドバイザー	一般住民 （小学生～70代）	4回・ 62名	多世代交流 人材発掘	ワークショップ（企画作り） イベント実践	西川副まち協（子ども部会）	講座の様子のパネル展示 手作りコンサートのYouTube配信
	唐津市 生涯学習文化財課	大良公民館	大良しあわせ プロジェクト	市職員 （社会教育主事 有資格者）	一般住民、小学5～6年生 （小学生～80代）	（大人）4回 + （小学生）1回 120名	多世代交流 地域参画 学校連携	トークセッション ワークショップ（未来ビジョン作り） 住民意識調査 地域インタビューと活動発表（小学生）	大良地区のみなさん（調査協力） 大良小学校 NPO唐津市子育て支援情報センター （唐ワンくん）	『講座通信』を発行（4回） 講座終了後、「大良まちづくり講座」を開催
	武雄市 生涯学習課	武内公民館	あなたが行きたい 祭りをつくらう	地域デザイナー	お祭り部会、自治公民館長、消防団、婦人会、 PTA、高校生等、関心のある一般住民 （高校生～80代）	0回 + 3回 + 1回（ふりかえり） 104名	多世代交流 地域参画	ワークショップ（祭りの企画作り）	武内町住みよいまちをつくる会 （お祭り部会）	お祭り部会で、プラスワン事業として講座が始まる前の0回に「決起集会」、 講座終了後に「ふりかえり会」を開催 『講座通信』を発行（3回） 講座終了後、お祭り部会でキャンプミーティングを開催（継続中）
2021年度 （R3）	佐賀市 公民館支援課	春日北公民館	みえる ひろがる まちづくり	ファシリテーター	春日北まちづくり協議会 （40～70代）	4回・ 53名	体制、組織づくり 地域参画	ワークショップ	春日北まち協	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、講座を延期 まち協を含めた打ち合わせを重ね、内容を組み替えながら開催 『講座通信』を発行（3回）
	伊万里市 まちづくり課	南波多 コミュニティセンター	南波多の 今と未来を考える	ファシリテーター	懇話会会員、地域支援員 （40～50代）	3回・ 19名	地域参画 人材育成	ワークショップ	懇話会会員 地域支援市職員	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、講座を延期 打ち合わせを重ね、内容を組み替えながら開催 講座の様子のパネルを作成（4枚） 講座の動画を作成（15分程度）

講座の企画書を作ってみよう！

課題解決支援講座でやってみようと思う

地域課題の洗い出しやこの講座のテーマ、目標など
みんなとの話し合いで出された意見をまとめたプロセスシートが
おおまかにできあがったら

次は、具体的な講座のプログラム作りに入ります。

課題から、地域の人にこの講座を受講することで
どうなってほしいのかの学習目標を書き出し
参加してほしい対象者や定員を絞りこんでいきます。

事前に準備が必要なものも
思いつく限り、書き出していきます。

そして、具体的な講座のプログラムを計画してみます。

何回講座にするのか？
その回数でどんな学びを展開していくのか？
各回ごとのテーマとねらいはどこにポイントを置くのか？
それができる講師はだれなのか？
うんうん唸りながら、自分なりに知恵を絞ります。

その後、それぞれが考えた講座のプログラムを持ち寄り
お互いに「セーの」で出して、企画を叩き合い
「ああでもない」「こうでもない」とぶつぶつ言い合いながら
ひとつの講座のプログラムを作りあげていきます。

企画書のフォーマット

団体名： 年 月 日（ ）

課題解決支援講座打ち合わせ用質問シート

聞き取り項目	回 答
現 状 (どんなところが問題点か?)	
まちの人に どうなってほしいか? (解決の方向性)	
テーマの絞り込み	
実施時期 (日時)	
開催場所	
講座の回数	
対象者	
受講者数	
講 師 コーディネーター ファシリテーター	
その他	

■ おうえん プロセスシート

※このページをコピーして使用してください

地域の現状・課題

人口・世帯数・世代・高齢化率・学校情報・困りごと等

まちの人に
どうなって
ほしい？

1年目の目標

2年目の目標

3年目の目標

テーマ

目標

実施時期

開催場所

対象者

受講者数

講師
コーディネーター
ファシリテーター

その他

講座回数

笑顔を引き出す工夫etc

最後に課題解決支援講座を開催するとき

初めて参加する住民のみなさんへ

なんとか居心地のいい空間を提供したい

普段どおりに会話ができるように…と願いを込め

あの手、この手を使った工夫を行いました。

笑顔を引き出す

ちょっとした参考になりますように。



チーム名は地域の動物でクリスマス仕様



参加者を迎える WELCOME の飾り



唐ワンくんも講座に花を添える



ほっと一息カフェコーナー



災害救援用炊飯袋で炊いたご飯を試食



一品持ち寄りの桜岡 de プランチ



最終講座でのセレモニーのくす玉



アイスペイクの松ぼっくりタワー



講座の写真を壁にデコレーション

編集後記

試行錯誤という言葉がピッタリのこの課題解決支援講座。

毎回の難題に職員は心が折れそうになりながら

3者協働でなんとか課題解決の糸口が見えないかと奮闘してきた10年間でした。

その10年間を積み重ねてみると

根っこはそこに住んでいる住民の未来や幸せにつながっていることが見えてきました。

この本は、社会教育ってなんだろう？地域の課題ってなんだろう？

という人にぜひ手に取ってほしいです。

手法はひとつではなくいろんな可能性があることと

あなたにはあなたなりの地域での試行錯誤と奮闘があることをお伝えできれば幸いです。

課題解決支援 おうえんBOOK

— このまちで見つける幸せ —

■ 監修

上野 景三(佐賀県立生涯学習センター 事業統括)

■ 編集委員会

上野 景三(委員長)

岡 幸江(アドバイザー/九州大学大学院 教授)

古賀 桃子(アドバイザー/ふくおかNPOセンター 理事長)

多良 淳二(元佐賀銀行文化財団事務局 事務局長)

山口ひろみ(唐津市子育て支援情報センター センター長)

鶴 ちふみ(佐賀市立北川副公民館 公民館職員)

須貝 遊(佐賀県まなび課 生涯学習・体験担当係長)

熊崎 康春(佐賀県立生涯学習センター 副館長)

関 弘紹(佐賀県立生涯学習センター 事業部長)

北村恵理子(佐賀県立生涯学習センター 企画主幹)

重永 桂子(佐賀県立生涯学習センター 企画副主任)

※順不同

■ 執筆・编者

上野 景三 P01、P05～P10、P31～P32、P45～P48

熊崎 康春

関 弘紹

北村恵理子

重永 桂子

発行年月日：2022年(令和4年)3月31日

発行：佐賀県立生涯学習センター(アバンセ)

〒840-0815 佐賀県佐賀市天神三丁目2-11

TEL. 0952-26-0011 FAX. 0952-25-5591 Email. syougai@avance.or.jp



アバンセ



<https://www.avance.or.jp/>



課題解決支援
おうえんBOOK

— このまちで見つける幸せ —



課題解決支援
おうえんBOOK



課題解決支援講座
レポート